

42670

教科書文庫

4.
815
51-1917
26000 26586

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

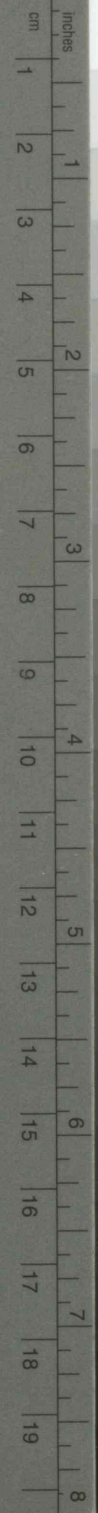


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教
5
20

375.9
Y.19
資料室

定 檢 省 部 文
日 九 月 二 年 六 正
語 國 校 學 範 師

吉田彌平
小山左文二
共著

師範學校
日本文典

東京 光風館藏版



教科書文庫
4
815
51-1917
2000026586

文部省檢定
師範學校國語教科書
大正六年二月九日

資料室

375.9
Y019

吉田彌平
小山左文二 共著
師範學校
日本文典

東京 光風館藏版

広島大学図書

2000026586





緒言

一本書は師範學校に於ける文法の教科書に充てんが爲に、師範學校用教授要目に準據して編纂せるものなり。

一本書は一冊を以て第一二兩學年間の教材に充つる目的を以て之を編纂せり。これ文法に關する系統的知識を與ふる點より見るも、又常に既習の事項を回顧しつゝ、新しき事項を習得す

るに便利なる點より見るも之を分冊するに優るものあるを信じたればなり。

一本書は全卷を四篇に分ち、第一篇に於て音及び文字の梗概を授け、第二篇に於て品詞を解説し、第三篇に於て更に之を補説し、第四篇に於て文章の結構に關する概略の知識を與へんことを務めたり。

一本書は先づ平易なる實例によりてその中に含まるゝ文法上の法則を歸納的に教授し、更に練

習問題によりて演繹的に之を應用せしめんことを務めたり。

一本書は常に文語と相對照して口語を示し、文法を習得する旁、知らず識らず語法の梗概に通ぜしめんことを期せり。

一本書は用例及び練習問題の選擇に意を用ひ、數種の師範學校用國語讀本中より、最も實用に適切なる語句を採録せり。

一本書は每章を以て二時間の教材に充て、第一時

に於てはその解説を與へ、第二時に於てはこれが復習並に練習を試み、確實にその章の教授を完結せしむべき方針を以て教材を按排せり。

大正五年十月

師範學校 日本文典

目次

第一篇 音及び文字……………一頁

第一章 音 假名……………一

直音の假名 拗音の假名 撥音の假名 促音の假名
長音符 踊字

第二章 漢字……………八

漢字 和字 音訓 畫 部首

第二篇 語 その一……………一五

第一章 總説 附品詞……………一三

單語 句 文 品詞の種類

第二章 名詞の種類……………一六

固有名詞 普通名詞 數詞

第三章 代名詞の種類及び用法……………二

人代名詞の稱 口語の人代名詞 指示代名詞の稱

口語の指示代名詞

第四章 動詞の活用 その一……………二七

四段活用 ら行變格活用 な行變格活用 上二段

活用 下二段活用

第五章 動詞の活用 その二……………三三

上一段活用 下一段活用 か行變格活用 さ行變

格活用 動詞の活用の識別

第六章 動詞の段……………三九

な行變格活用の動詞の段 四段活用及びら行變格

活用の動詞の段 か行變格活用及びさ行變格活用

の動詞の段 上二段活用及び下二段活用の動詞の

段 上一段活用及び下一段活用の動詞の段

第七章 口語動詞の活用及び段……………四五

口語四段活用 口語か行變格活用 口語さ行變格

活用 口語上一段活用 口語下一段活用

第八章 動詞の自他……………五一

自動詞 他動詞

第九章 動詞の音便……………五七

い音便 う音便 撥音便 促音便

第十章 動詞の語尾の假名遣……………六一

第十一章 形容詞の活用……………六六
 第一類の活用 第二類の活用 口語形容詞の活用
 第十二章 形容詞の段附音便……………六九
 第十三章 助動詞の種類及び活用 その一……………七五
 時の助動詞 打消の助動詞 推量の助動詞 受身の助動詞 可能の助動詞
 第十四章 助動詞の種類及び活用 その二……………八一
 使役の助動詞 尊敬の助動詞 指定の助動詞 詠歎の助動詞 希望の助動詞 比説の助動詞
 第十五章 口語助動詞の種類及び活用……………八六
 時の助動詞 打消の助動詞 推量の助動詞 受身の助動詞 可能の助動詞 使役の助動詞 尊敬の助動詞 指定の助動詞 希望の助動詞

第十六章 助動詞の段……………九二
 第十七章 副詞の用法……………九六
 第十八章 接續詞の種類及び用法……………九九
 並列累加の場合に用ふるもの 選擇の場合に用ふるもの 反意を示す場合に用ふるもの 原因理由を表す場合に用ふるもの
 第十九章 感動詞の種類及び用法……………一〇四
 文の首につくもの 文の末につくもの
 第二十章 助詞の種類及び用法……………一〇八
 名詞代名詞に添はる助詞 種々の語に添はる助詞 動詞形容詞助動詞に添はる助詞
 第二十一章 品詞の轉成……………一一四

轉來の名詞 轉來の代名詞 轉來の副詞 轉來の
接續詞

第三篇 語 その二……………二七

第一章 語の構造 その一……………二七

疊語 熟語

第二章 語の構造 その二……………二三

接頭語 接尾語

第三章 動詞と助動詞との接續 その一……………二六

動詞の將然段に續く助動詞

第四章 動詞と助動詞との接續 その二……………二三

動詞の連用段に續く助動詞

第五章 動詞と助動詞との接續 その三……………二六

動詞の終止段に續く助動詞

第六章 動詞と助動詞との接續 その四……………二六

動詞の連體段に續く助動詞 動詞の已然段に續く

助動詞

第七章 助動詞相互の接續……………二四

完了助動詞と過去助動詞との重用 完了助動詞と

未來助動詞との重用 完了助動詞と過去推量助動

詞けむとの重用

第八章 用言と助詞との接續 その一……………二九

假定のばと確定のば 假定のとともと確定のとと

も

第九章 用言と助詞との接續 その二……………二五

禁止のな 禁止のな…そをがについ

から でのみ ばかり まで
 第十章 用言と助詞との接續 その三……………一六二
 並列の^とと指定の^と 疑問の^やか
 第十一章 品詞の識別……………一六六
 な^のの識別 な^むの識別 に^のの識別 し^のの識別 つ^の
 の識別 ば^やの識別 は^がを^もや^かの識別

第四篇 文……………一七五

第一章 文の成分……………一七五
 主語 説明語 客語 補語 修飾語

第二章 文の成分の排列及び省略……………一八三
 常の位置 成分の倒置 成分の省略

第三章 節……………一八九

名詞節 形容節 説明語節 對立節

第四章 文の構造上の分類……………一九三
 單文 複文 重文

第五章 文の性質上の分類……………一九七
 敘述文 疑問文 命令文 感歎文

第六章 文の結法附係結……………二〇四
 終止段にて結ぶもの 連體段にて結ぶもの 已然
 段にて結ぶもの 命令段にて結ぶもの 助詞又は
 感動詞にて結ぶもの

目次終



師範學校 日本文典

第一篇 音及び文字

第一章 音 假名

人の肺臓より呼出する空氣が、聲帶又は口内の諸機關に觸れて發する聲を音といひ、音によりて思想を外に表せるものを語又は言語といひ、一國の最多數の人の用ふる言語を其の國の國語といふ。

音をあらはす一定の符シヨウを音字といひ、意義を示す一定の符を意字といひ、此等を併せ稱して文字といふ。

○我が國にて用ふる假名は音字の一種にして、漢字は意字の一種なり。

音 語 國語 音字 意字 文字

假名
直音の假名

假名に二種あり。一を片假名といひ、一を平假名といふ。此等の假名はその音の性質によりて左の數種に分つ。一、直音の假名 直音の假名は左の如し。

片假名	平假名
ア	あ
イ	い
ウ	う
エ	え
オ	お
カ	か
キ	き
ク	く
ケ	け
コ	こ
サ	さ
シ	し
ス	す
セ	せ
ソ	そ
タ	た
チ	ち
ツ	つ
テ	て
ト	と
ナ	な
ニ	に
ヌ	ぬ
ネ	ね
ノ	の
ハ	は
ヒ	ひ
フ	ふ
ヘ	へ
ホ	ほ
マ	ま
ミ	み
ム	む
メ	め
モ	も
ヤ	や
(イ)	(い)
ユ	ゆ
(エ)	(え)
ヨ	よ
ラ	ら
リ	り
ル	る
レ	れ
ロ	ろ

五十音圖
行
列段

清音の假名

いろは歌

以上の如く排列したるものを五十音圖といふ。

○五十音圖の縦のならびを行といひ、横のならびを段又は列といふ。各行各段ともその始の音を取りて名とす。あ行か行あ段(あ列)い段(い列)等の如し。

○や行のいえは、あ行のいえと同形にして、わ行のうは、あ行のうと同形なり。故に五十音圖の假名は合計四十七字なりと知るべし。

○五十音圖の假名を清音の假名と稱することもあり。

○假名は又僧空海の作と傳へらるゝいろは歌といふものに排列せらるゝことあり。即ち左の如し。

いろはにほへと ちりぬるを
 わかよたれそ つねならむ
 うゑのおくやま けふこえて
 あさきゆめみし ゑひもせす

右の外、直音の假名に左の二十五字あり。

ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
パ	ピ	プ	ペ	ポ	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ

濁音の假名
半濁音の假名

○右の中、始めの二十字は之を濁音の假名といふ。
○終の五字は之を半濁音の假名といふことあり。

二、拗音の假名

拗音とは、ちやわん(茶碗)じゆばん(襦袢)きんぎよ(金魚)くわし(菓子)のちやじゆぎよくわの如く、或音にやゆよわの音を合せて一齊に發する音をいふ。拗音は或假名の下にやゆよわを記して表はすこと左の如し、

キヤ	キユ	キヨ	キヤ	キユ	キヨ
----	----	----	----	----	----

撥音の假名

ギヤ	ギユ	ギヨ	ギヤ	ギユ	ギヨ
シヤ	シユ	シヨ	シヤ	シユ	シヨ
ジャ	ジュ	ジョ	ジャ	ジュ	ジョ
チャ	チュ	チョ	チャ	チュ	チョ
ヂヤ	ヂユ	ヂヨ	ヂヤ	ヂユ	ヂヨ
ニヤ	ニユ	ニヨ	ニヤ	ニユ	ニヨ
ヒヤ	ヒユ	ヒヨ	ヒヤ	ヒユ	ヒヨ
ビヤ	ビユ	ビヨ	ビヤ	ビユ	ビヨ
ミヤ	ミユ	ミヨ	ミヤ	ミユ	ミヨ
リヤ	リュ	リヨ	リヤ	リュ	リヨ
クワ			クワ		
グワ			グワ		

○時としては、やゆよわを下方右側に小さく記することもあり。

三、撥音の假名

撥音とは、「ピン」「ボン」「しんぶん」(新聞)等のン。

促音の假名

んンの如く、或音の下に來りて撥ぬる音をいふ。撥音を表はすにはんンを用ふ。

四、促音の假名 促音とは、「コツッ」「洋ッ」「ざッ」「しッ」(雜誌)等のツッの如く、上の音の終を遮りて急に下の音に移さんとする時に起る促る音をいふ。促音は或文字の下にツッを記して之を表はす。

○時としては、ツッを下方右側に小さく記することもあり。

長音符

五、長音符 長音とは、「ベー」「スポール」「ろーんてにす」のべー！ポーろーの如く、上の音を長く引きて呼ぶをいふ。長音を表はすには長音符(ー)を用ふ。

○長音符は、主として西洋の語を寫すに用ひらる。

踊字

六、踊字 踊字とは、「チッ」「父ッ」は「母ッ」「ハッ」「幅ッ」は「略ッ」イヨッくッ

(愈)ひとッ(人々)の如く、同じ假名を重用するとき用ふる、ひとッひとッをいふ。

練習

- 一 音とは何ぞ。
- 二 語とは何ぞ。
- 三 文字とは何ぞ。
- 四 假名の種類を挙げ、且之を説明せよ。
- 五 五十音圖の各行各段を暗誦せよ。
- 六 片假名、平假名にて五十音を記せ。
- 七 平假名にて、いろは歌を記せ。
- 八 次の語の読み方を片假名と平假名とにて記し、且その假名の種類を分て。

勅語。活潑。春色。着眼。寫真。蒟蒻。審判官。出缺席。
歐羅巴。天真爛漫。人間社會。

✓九長音符を用ふべき語五箇を挙げよ。

✓一〇 踊字を用ひて次の語を記せ。

蜺。雀。杜鵑。葛籠。様々。呉々も。賑々し。輕々し。
抄々し。返す々々。

第二章 漢字

漢字

一、漢字 漢字とは花鳥風月の如く漢土より傳來したる文字をいふ。此等の漢字は何れも字毎に固有の意義を有せること前章に述べたるが如し。

○漢字はその數凡そ四五萬あれど、現今我が國にて普通に用ひらるゝは三千乃至四千なり。

二、和字

和字とは、フジ辻、コム込、サカキ榊、キミ檉、タケ峠、シメ躰、セ紛等の如く、漢字の形に

和字

倣ひ、我が國にて作れる文字をいふ。

○和字にて今普通に用ひらるゝは四十字内外なり。

三、音訓 漢字の読み方には音と訓とあり。前例の花鳥風月をくわてうふうげつとよむは音にして、はなとりかぜつきとよむは訓なり。漢字の音は特に之を字音と稱す。字音は支那音の我が國に傳はれるものにして、訓は漢字を國語に譯してよめるものなり。

○漢字を音にてよむを音讀といひ、訓にてよむを訓讀といふ。

○和字には訓ありて音なし。

四、畫 畫とは漢字の一筆をいふ。漢字には一畫乃至數畫より成るものもあれど、中には三十餘畫より成るものもあり。

畫

訓讀

音讀

字音

訓

音

部首 扁 旁 冠 脚

(例) 一(一畫) 人(二畫) 川(三畫) 兄(五畫) 村(七畫)
 家(十畫) 賞(十五畫) 警(二十畫) 廳(廿五畫) 廳(卅三畫)
 五、部首 部首とは漢字分類の基準となる部分をいふ。
 通例左の數種に大別せらる。
 一、扁 漢字の左方にあるもの、即ち好松砂銅に於ける女
 (ナシナ)・木(キ)・石(イシ)・金(カネ)の類をいふ。
 二、旁 漢字の右方にあるもの、即ち段都頭雉に於ける爰
 (タル)・頁(オホガヒ)・大邑(オホガタ)・頁(オホガヒ)の類をいふ。
 三、冠 漢字の上部に冠せらるゝもの、即ち家筆花雪に於
 ける宀(ウカン)・竹(タケカ)・廿(タサカンムリ)・雨(アメカ)の類をいふ。
 四、脚 漢字の下部にあるもの、即ち堂委岳磐に於ける土
 女山石の類をいふ。

垂 達 首 構

五、垂 漢字の上方より左方に垂れたるもの、即ち厘府疾
 に於ける厶(ガシ)・厶(ガシ)・厶(ガシ)・疾垂(ヤヒダシ)の類をいふ。
 六、達 漢字の一部を載するもの、即ち延遠起麴に於ける
 延(エン)・遠(エン)・走(ソウ)・麥(マク)の類をいふ。
 七、首 漢字の上方にあるもの、即ち全公罪髮に於ける入
 (イ)・首(シウ)・八(ハ)・首(シウ)・四(シ)・首(シウ)・彭(ヘイ)の類をいふ。
 八、構 漢字の四方又は二方三方を圍めるもの、即ち匣國
 開闕に於ける匚(ヘイ)・匚(ヘイ)・門(カド)・門(カド)の類をいふ。
 ○部首はその數凡そ三百種程あり、而して前に示せるものゝ外なほ
 特別の名稱を有するもの尙少なからず、今その重なるものを左に
 示さん。
 一(入)扁 一(行)人扁 二(水) 三(水) 立(身)扁 手(手)扁 又(獸)

扇セ 禾ホ禾ホ扇セ リ立リ刀カ (連レ火カ) 月ツキ肉ニク月ツキ 貝カイ小コ貝カイ 卜ウラ小コ邑チ

練習

一次の文字の音と訓とを示せ。

雨 露 霜 雪 高 低 深 淺 學 問 教 育

二次の文字の畫數を問ふ。

本 孝 宮 鳴 曉 斷 櫻 觀

漢字の部首の重なる區別を問ふ。

四次の文字の部首を舉げよ。

仙 峰 圓 肩 附 郡 利 雉 病 近

第二篇 語 その一

第一章 總說 附品詞

一、單語 鳥花櫻散る。美しきのぬ等は、何れもきれいの意味を示せり。かゝるものを單語といふ。

二、句 「美しき鳥」櫻の花等は、何れも二三の單語より成りて、やゝ込み入りたる意味を示せり。かゝるものを句といふ。

三、文 「美しき鳥鳴く」櫻の花散りぬ等は、何れも幾つかの單語相集りて、一の完全なる意味を示せり。かゝるものを文又は文章といふ。

文章の中、一國の最多數の人の用ふるものを其の國の國

單語 句 文 國文

文語 口語 文法 語法

文といふ。

我が國にては、文章に書く語と談話に用ふる語とや、其の形を異にせり。前例の「美しき鳥鳴く」「櫻の花散りぬ」の如きは文章に書く語にして、「美しい鳥が鳴く」「櫻の花が散つた」の如きは談話に用ふる語なり。前者を文語といひ、後者を口語といふ。

口語及び文語にはそれと一定の法則あり。之を文法といふ。

○時としては、口語の法則を口語法又は語法といひ、文語の法則を文語法又は文法と稱することあり。

四、品詞 單語は之を分ちて、

名詞 代名詞 動詞 形容詞 助動詞 副詞

接續詞 感動詞 助詞

の九種となす。此等の一つとを品詞といふ。今左に各品詞の性質用法の大略を説明せん。

一、名詞 山川梅鶯日本富士山本居宣長學問勉強等の如く、有形無形の事物の名を示す語をいふ。

二、代名詞 われ汝彼誰これそれあれいづれこゝそこかしこいづここちそちあちいづち等の如く、名詞の代りに用ひらるゝ語をいふ。

○以上名詞及び代名詞は、通常、文の主となり、題目となるものなり。此の二品詞を併せ稱して體言といふ。

三、動詞 書く・讀む・消ゆ・流る・有り・居り等の如く、事物の動作又は存在を示す語をいふ。

體言 動詞

形容詞

四、形容詞 白し・重し・厚し・美し・樂し・正し等の如く、事物の性質・狀態を形容する語をいふ。

用言

○以上動詞及び形容詞は、體言たる名詞代名詞に對して何等かの説明をなす語なり。動詞及び形容詞を併せ稱して用言といふ。

助動詞

五、助動詞 「讀まず」「讀みき」「讀むべし」のずきべし等の如く、おもに動詞に添ひてその意味を助くる語をいふ。

副詞

六、副詞 「必ず行け」「最もよし」「大いに喜ぶ」「甚だ樂し」の必ず最も大いに甚だ等の如く、おもに動詞・形容詞等に副ひて之を限定する語をいふ。

接續詞

七、接續詞 「山又山」「桃の花及び櫻の花」「文を學び、或は武を講ず」の又及び或は等の如く、語句又は文を接續するに用ふる語をいふ。

感動詞

八、感動詞 「あな嬉し」「やよ待て」「あゝ悲しいかな」「行けや人々」のあなやよあゝかなや等の如く、物に感動したる時に發する語をいふ。

助詞

九、助詞 「鶯の聲」「何ぞ知らん」「善きか悪しきか」「視れども見えず」のぞかども等の如く、名詞・代名詞・動詞・形容詞等に添ひて下の語との關係を定むる語をいふ。

○助詞は助辭又はテニヲハと稱することあり。
練習

- 一 單語とは何ぞ。句とは何ぞ。
- 二 文とは何ぞ。國文とは何ぞ。
- 三 口語と文語との區別を問ふ。
- 四 文法とは何ぞ。
- 五 品詞とは何ぞ。又、その種類を擧げ、一々之を説明せよ。

六次の文につきて各品詞を指摘せよ。

- (イ) 山 青く 浦 霞む。
- (ロ) 朝日將軍 の 遺跡 は 何れ の 處 ぞ。
- (ハ) 大いに 勉め 大いに 遊べ。
- (ニ) 學 を 勵み、且 業 を 務む。
- (ホ) 小舟 漕ぎ 行く 人 あり 岸 の 此方 に 眺むる 人 あり。
- (ヘ) 嗚呼 忠臣 楠子 の 墓。
- (ト) 暮色 は 東山 を こめ、叡山 を めぐり、やうやう 鴨川 に 襲ひ 來れり。

第二章 名詞の種類

名詞は事物の名をいふ語なることは、既に前章に之を述べたり。今少しく之を補説せん。

名詞の種類

山川梅鶯机硯鍋釜等は物名にして、富士山大井川東京伊藤博文乃木希典等は地名人名なり。故に皆名詞なり。上下左右縦横東西南北等は位置又は方角をあらはす名にして、亦名詞なり。

春夏秋冬心夢命等は形なき物の名にして、運動集會働遊忠孝等は事柄の名なり。故に是も亦名詞なり。

固有名詞

普通名詞

○富士山乃木希典の如き地名人名は、その一つの山一人の人に限りたる名にして、他の山他の人には通用せざるが故に、之を固有名詞といひ、山川梅鶯等はその種類のすべてに通じて用ひらるゝが故に、之を普通名詞といふ。

一・二・三つ四つ等は數量をあらはす語なり。第五六番七つめ等は順序をあらはす語なり。此の如く數量又は順

數詞

序をあらはす語を數詞といふ。數詞は名詞の一種なり。

○廣く數量をあらはすに一個二個といひ、人の數をあらはすに三人、四人といひ、鳥の數をあらはすに五羽、六羽といひ、獸の數をあらはすに七頭、八頭といひ、魚の數をあらはすに九尾、十尾といひ、一つ以上の數を一纏にしてあらはすに筆一對、屏風二雙、靴足袋三ダースなどいふが如きも亦數詞なり。一尺、二里、三升、四オンス、五匁等の度量衡をあらはす語、六圓、七弗の如き金額をあらはす語も亦數詞なり。

練習

- 一 名詞とは如何なるものか。
- 二 例を擧げて固有名詞と普通名詞とを説明せよ。
- 三 數詞とは何ぞ。又其の種類を示せ。
- 四 次の文より名詞を擇び出し、且、之を類別せよ。
- イ 西山の花見る人は、多くまづ御室を指す。

人代名詞

第三章 代名詞の種類及び用法

代名詞は之を人代名詞と指示代名詞とに分つ。人代名詞とは、われ、汝、彼、誰の如く人の名に代用せらるゝ

- (ロ) 須磨の海岸は、松青く、砂白く、空氣も亦清し。
- (ハ) 十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人。
- (ニ) 大山、大將はクロバトキンの率ゐたる三十萬の大軍を奉天に破れり。
- (ホ) 金剛山を望みては楠公の義勇を仰ぎ、四條堰を顧みては小楠公の忠節を慕ふ。
- (ヘ) 海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫し出せるは、歌か、詩か、抑、畫か。
- (ト) 漢字の訓は、多くの人の手を借り、多くの年月を経て漸次に定まりしものにて、一人一代に成りしものにあらず。

人代名詞の稱

自對
對稱
他稱
不定稱

ものをいひ、指示代名詞とは、これ、それ、こゝ、そこ、こち、そちの如く、事物・地位・方向を示すに用ひらるゝものをいふ。
一、人代名詞の稱 人代名詞は、その代用せらるゝ人の自、他、定、不定等によりて、自稱・對稱・他稱・不定稱の四種に分る。自稱とは、余・われ・おのれ・私・僕の如く、己の名に代用せらるるものをいひ、對稱とは、汝・貴君・あなた・おまへの如く、對手の名に代用せらるゝものをいひ、他稱とは、彼・あれ・あの人の如く、己と對手との外なる人の名に代用せらるゝものをいひ、不定稱とは、誰・某・どなたの如く、それと定めざる人又はわからぬ人を指すものをいふ。

○自稱のちのれ・われは、時として對稱に用ひられ、不定稱の某は、時として自稱に用ひらる。

轉用の人代名詞

複數の人代名詞
口語の人代名詞

○君・卿を對稱に、私・僕を自稱に用ふるは、名詞を代名詞に轉用せるものなり。

○われ・く・君たち・あなたがた・かれらなどいへば、指さるゝ人の二人以上なることを示す。即ち複數の人代名詞なり。

二、口語の人代名詞 人代名詞には口語と文語とによりてそのいひざまを異にするものあり。重なる人代名詞は左の對照表によりて之を知るべし。

自稱	對稱	他稱	不定稱
(文) わ 私	(文) な あなた	(文) か あ	(文) た だれ
(口) われ 自分	(口) なれ おまへ	(口) か あのかた	(口) たれ どなた
余 わらは(女)	汝 御許(女)	あれ	なにがし
僕	君		
	君		

指示代名詞の稱

近稱
中稱
遠稱
不定稱

三、指示代名詞の稱 指示代名詞は、その指示する事物地位・方向の遠・近・定・不定等によりて、之を近稱・中稱・遠稱・不定稱の四種に分つ。近稱とは、こ、これ、こゝ、こなた、こちらの如く、己の身に近接せる事物・地位・方向を指示するものをいひ、中稱とは、そ、それ、そこ、そなた、そちの如く、己の身より稍離れたる事物・地位・方向を指示するものをいひ、遠稱とは、か、かれ、あれ、あそこ、かしこ、かなた、あなた、あちの如く、己の身より遠き事物・地位・方向等を指示するものをいひ、不定稱とは、いづれ、なに、いづこ、いづく、いかた、いづちの如く、その指示する事物・地位・方向の定まらず、又は分らぬ事物・地位・方向を指示するものをいふ。

○こ、そは獨立しても用ひられ、又、この、その等の如く助詞のと結合して

指示代名詞の轉用

口語の指示代名詞

も用ひらる。か、あは、かの、あの等の如く、おもに助詞のと結合して用ひらる。
○こなた、こちらは自稱の人代名詞に、そこ、そなた、あなた、そちは對稱の人代名詞に、どなたは不定稱の人代名詞に轉用せらるゝことあり。
四、口語の指示代名詞 指示代名詞も、亦口語と文語とによりて多少の差異あり。左の對照表によりてその一斑を知るべし。

種類	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	(文) こ これ	(口) こ これ	(文) か かれ	(文) いづれ なに
地位	こゝ	こゝ	かしこ	(口) いづこ どこ

方向	
こち	こちら
こなた	こつち
そち	そなた
そち	そつち
あなた	あなた
あち	あつち
あなた	あなた
あち	あつち
あなた	あなた
あち	あつち
あなた	あなた
あち	あつち

練習

一 代名詞の種類を別て。

二 人代名詞及び指示代名詞の稱を説明せよ。

三 例を擧げて、代名詞が他の代名詞に轉用せられ、或は名詞が代名詞に轉用せらるゝ場合を示せ。

四 次の文より代名詞を擇び出し、且、その種類及び稱を示せ。

- (イ) これはこゝに、それはそこに、かれはかしこにそのまゝおけ。
- (ロ) わが友はいづちに行きたりけん。あなたこなたたづねれど見當らず。
- (ハ) 汝は誰ぞ。そを何處にか負ひて行く。「聞召せ、背負ひまつるは奴わが主と頼む乃木將軍の愛兒なり。」

動詞は何れも其の語形を變化す。例へば飛ぶといふ動詞が、

第四章 動詞の活用 その一

- (ニ) あそこに居る人はどなたですか。あれは私の兄の長男でございます。
- (ホ) この美はかの美と相映じて、自然の彩色をなす。
- (ヘ) 明治天皇は我等國民に勅語を下し賜ひて、朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ威厥ノ徳ヲ一ニセンコトラ庶幾フとのたまへり。

飛	
ば	鳥飛ばず。
び	鳥飛びたり。
ぶ	鳥飛ぶ。
べ	鳥飛び。

語幹
語尾
活用

と變化するが如し。而してとの如く變化せざる部分を語幹といひ、ば び ぶ べの如く變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といふ。

動詞の活用には、四段ら行變格な行變格上二段下二段上一段下一段か行變格さ行變格の九種あり。左に之を略說せん。

四段活用

一、四段活用 動詞の語尾が五十音圖中のあいうえに活用するものをいふ。前例の飛ぶの活用の如きは即ち是なり。咲く、漕ぐ、推す、持つ、習ふ、學ぶ、讀む、賣る等の動詞は、皆此の活用に屬す。

○此等の動詞は、その活用の行によりて、か行四段活用さ行四段活用なといふ。以下皆之に倣へ。

ら行變格活用

○四段に活用するは、か が さ た は ば ま らの八行なり。
○あらゆる動詞の中、四段活用に屬するもの最も多し。
二、ら行變格活用 五十音圖中ら行のあ い う え四段に活用する語の中有り、居り、侍りの三語をいふ。

例

有	ら(あ)段	明日は降雨あらん。
	り(い)段	今日降雨あり。
	る(う)段	能ある鷹は爪をかくす。
	れ(え)段	才はあれど、徳はなし。

○此の活用の動詞は通常のら行四段活用に似たれども、文章の切る、場合をあらはすに次の如き相違あり。是、別に一格を立つる必要ある所以なり。

學徳共に成る。ら行四段 るにて言ひ切る。

な行變格活用

善に善報あり。ら行變格 りにて言ひ切る。
三、な行變格活用 五十音圖中な行のあ、い、う、え、四段に活用し、且、そのう段の音にるれの添はれるものをいふ。

(例)

な(あ段)	夜更くれども、往なず。
に(い段)	夜更けて往にたり。
往(う段)	夜更けて往ぬ。
ぬる	夜更くれども、往ぬるを欲せず。
ぬれ	夜更けて往ぬれども、敢へて留めず。
ぬ(え段)	夜の更けぬうちに往ぬ。

○此の動詞は、う段の音にるれの添はる點通常の四段活用に異なり、是別に一格を立つる必要ある所以なり。

○此の活用に屬する動詞は死ぬ、往ぬの二語あるのみ。

上二段活用

四、上二段活用 五十音圖中い、うの二段に活用し、且、その

う段の音にるれの添はれるものをいふ。

(例)

起	き(い段)	彼は未だ起さず。
	く(う段)	余は早く起く。
	くる	遅く起くる事なかれ。
	くれ	早く起くれば心地よし。

生く、過ぐ、落つ、閉づ、用ふ、亡ぶ、恨む、老ゆ、懲る等は、何れも此の活用に屬せり。

○上二段に活用するは、か、が、た、だ、は、ま、や、らの九行なり。

○上二段活用の動詞は、其の數四段活用及び下二段活用の動詞に次ぐ。

五、下二段活用 五十音圖中え、うの二段に活用し、且、そのう段の音にるれの添はれるものをいふ。

下二段活用

(四)

告ツ
 げ(え段) 雞曉を告げぬ。
 ぐ(う段) 雞曉を告ぐ。
 ぐる 雞の曉を告ぐる聲勇まし。
 くれ 雞曉を告ぐれば、必ず起く。

得受く投ぐ馳す交ず捨つ出づ尋ぬ教ふ總ぶ褒む榮ゆ枯
 る植う等は、何れも此の活用に屬せり。

○ 下二段活用は五十音圖の各行にわたれり。濁音もまたがさだばの
 四行皆活用す。

○ 得はその語の全體を變化す。

○ 下二段活用の動詞は、四段活用の動詞に次ぎて、其の數頗る多し。

練習

一 動詞の語幹・語尾を説明せよ。

二 動詞の活用とは何ぞ。

三 四段ら行變格な行變格の相違點を示せ。

四 上二段活用と下二段活用との異同を述べよ。

五 次の文より動詞を指摘し、且その活用を示せ。

(イ) 茶店あれども、客來らず。

(ロ) 月落ち烏啼きて霜天に滿つ。

(ハ) かばねは朽ちて骨となり、刃は折れて霜結ぶ。

(ニ) 帆を半ば張りて出で行く船あり、櫓をあやつりて横ざる舟

あり。

(ホ) 死ぬべき時に死なずば、死ぬるにまざる恥あらん。

(ヘ) 濱邊に櫓を立て、網を干したる漁村を左に眺め渡しつゝ、

長洲に沿ひ、北に向ひて進む。

(ト) 磯に碎けて折れかへる波、波路の末に浮き立つ雲、何物か造

化の妙筆にもれん。

上一段活用

第五章 動詞の活用 その二
六、上一段活用 五十音圖中いの一、二段にのみ活用し、且、これにるれレの添はれるものをいふ。

(例)

「さ(い)段…帷子をささず。
「着(さ)る…帷子をささる。
「さ(れ)…帷子をさされば涼し。

著る・似る・煮る・干る・見る・願みる・鑑みる・惟みる・射る・鑄る・居る・用みる・率みる等は、何れも此の活用に屬せり。

○上一段に活用するは、かなはまやわの六行なり。

○上一段活用に屬する動詞は、前記の十數語に過ぎず。

○用ゐるは、は行上二段にも活用す。

下一段活用

七、下一段活用 五十音圖中えの一、二段にのみ活用し、且、こ

れにるれレの添はれるものをいふ。

(例)

「け(え)段…鞠をけん。
「蹴(け)る…鞠をける。
「ける…鞠をければ樂し。

○下一段活用に屬する動詞は、蹴るの一語あるのみ。

八、か行變格活用 五十音圖中、か行のおいう三段に活用し、且、そのう段の音にるれレの添はれるものをいふ。

(例)

「こ(お)段…秋未だこぞず。
「さ(い)段…秋さぬ。
「來(く)う段…秋く。
「くる…秋を待つ。

か行變格活用

さ行變格活用

○此の活用に屬する動詞は、たゞ來の一語あるのみ。

九、さ行變格活用 五十音圖中、さ行のえ、い、う三段に活用し、且、そのう段の音にるれの添はれるものをいふ。

(例)

せ	え	段	…	善	き	事	を	せ	ん			
し	い	段	…	善	き	事	を	し	ぬ			
爲	す	う	段	…	善	き	事	を	す			
す	る	…	…	善	き	事	を	す	る	人	か	な
す	れ	…	…	善	き	事	を	す	れ	ば	樂	し

○さ行變格に屬する動詞は、(爲、おはす、在す)の二語あるのみ。されどこのすといふ動詞は、心す、罪す、信す、勉強す等の如く、名詞と結びつきて活用すること多し。

動詞活用の識別

動詞活用の識別 動詞の諸活用中、上下一段活用並に變格の諸活用は語數極めて少なければ、先づ之を記憶し、而して後、四段及び上下二段の活用を識別すべし。其の法左の如し。

四段活用の識別

一、四段活用 書かず、言はずの如く、打消の意をあらはすに、語尾あ段にてず^レに接す。

上二段活用の識別

二、上二段活用 起きず、報いずの如く、打消の意をあらはすに、語尾い段にてず^レに接す。

下二段活用の識別

三、下二段活用 冷えず、飢ゑずの如く、打消の意をあらはすに、語尾え段にてず^レに接す。

練習

一、上一段活用と下一段活用との異同を説明せよ。

- ✓ 二 上一段活用に属する動詞を挙げよ。
- ✓ 三 例を示してか行さ行の兩變格活用を説明せよ。
- ✓ 四 四段上二段下二段の動詞の簡易なる識別法を問ふ。
- 五 名詞が動詞となる場合には、通例如何なる活用をなすか。例を示して之を説明せよ。

六 次の文の中の動詞を指摘し、且、その活用を示せ。

(イ) 子養はんとすれども、親待たず。
 (ロ) 能はざるにあらず、せざるなり。
 (ハ) 見渡せば、ながひれば、見れば、須磨の秋。
 (ニ) 重なる岩根をよみしめて、生ひ立つ松、その間を點綴して咲きほこる花。
 (ホ) 秋の日は山のは近し、暮れぬまに母に見えなん、歩めわがこま。

な行變格活用
の動詞の
段

將然段

第六章 動詞の段

動詞の各段にはそれと、特別の用ひ方あり。今各活用につき、例を示して之を説明せん。

一、な行變格活用の動詞の段

(四)

死

な	(第一段) ぬれ將に王事に死なんとす。
に	(第二段) 一門悉く王事に死に果てたり。
ぬ	(第三段) 潔く王事に死ぬ。
ぬる	(第四段) 王事に死ぬる武士。
ぬれ	(第五段) 死ぬれば萬事休す。
ぬ	(第六段) 潔く王事に死ぬ。

第一段死なは、事の未だ然らざることを假にいふ場合に用ふるが故に、將然段といひ、第二段死には、多く用言に連

連用段
終止段
連體段
已然段
命令段

なる場合に用ふるが故に、連用段といひ、第三段死ぬは、多く文句の切る、場合に用ふるが故に、終止段といひ、第四段死ぬるは、多く體言に連なる場合に用ふるが故に、連體段といひ、第五段死ぬれば、或條件の已に成立せることをいふ場合に用ふるが故に、已然段といひ、第六段死ぬは、命令・希求の意を示すに用ふるが故に、命令段といふ。

○六段の名稱はその用ひ方の一部につきて便宜上與へられたるものなれば、各段の用ひ方これにて盡きたりといふにはあらず。例へば「死なす」の「死な」は將然段なれども、將に然らんとする意なく、甲も死に、乙も死ぬの死には連用段なれども、單に中止の意を示すのみにて、用言に連續せず、「死ぬべし」の死ぬは終止段なれども、文意なほ終止せざるが如し。

○動詞の連用段は、又時として名詞に轉ずることあり、ひかり、光、つとめ

四段活用及
びら行變格
の活用
の動詞

二、四段活用及びら行變格活用の動詞の段

(務)おこなひ行等は、皆此の例なり。

(例)

降^フ
ら(將然) 雨將に降らんとす。
り(連用) 雨降り注ぐ。
る(終止) 雨降る。
る(連體) 雨降る日。
れ(已然) 雨降れば地固まる。
れ(命令) 雨よ降れ。

有^フ
ら(將然) 功有らば賞せられん。
り(連用) 功有りて賞せらる。
り(終止) 善に善報有り。
る(連體) 能有る鷹は爪をかくす。
れ(已然) 功有れども賞せられず。
れ(命令) 功に相當する恩賞有れかし。

○四段活用の動詞は終止段と連體段と同形にして、已然段と命令段とも亦同形なり。
○ら行變格活用の動詞は連用段と終止段と同形にして、已然段と命令段とも亦同形なり。

か行變格活用及びさ行變格活用の動詞の段

三、か行變格活用及びさ行變格活用の動詞の段

こ (將然) 春はやがてこん。
 さ (連用) 春さぬ。
 く (終止) 春く。
 くる (連體) くる春を待つ。
 くれ (已然) 春くれど、花咲かず。
 こよ (命令) 春よ來よ。

せ (將然) 雪合戦をせば面白からん。
 し (連用) 雪合戦をしはじむ。
 す (終止) 雪合戦をす。
 する (連體) 雪合戦をする子供あり。
 すれ (已然) 雪合戦をすれば面白し。
 せよ (命令) 雪合戦をせよ。

四、上二段活用及び下二段活用の動詞の段

き (將然) 未だ起きさず。
 き (連用) 早く起き、遅く寝ぬ。
 くれ (終止) 早く起く。

へ (將然) 將に算術を教へんとす。
 へ (連用) 算術を教へたり。
 ふ (終止) 算術を教ふ。

上二段活用及び下二段活用の動詞の段

上二段活用及び下二段活用の動詞の段

五、上二段活用及び下二段活用の動詞の段

起 (起) 起くる (連體) 遅く起くる事勿れ。
 くれ (已然) 早く起くれば快し。
 きよ (命令) 早く起きよ。
 〇上二段活用及び下二段活用の動詞は、將然段と連用段と同形なり。又命令段はいづれもよを含む。

見 (見) みる (連體) 花をみる人あり。
 み (連用) 花をみつむ。
 みる (終止) 花をみる。
 みれ (已然) 花をみれば樂し。
 みよ (命令) 花をみよ。

教 (教) 教ふる (連體) 算術を教ふる教師あり。
 くれ (已然) 一を教ふれば十を知る。
 へよ (命令) 余に算術を教へよ。

〇上一段活用と下一段活用とは、將然段と連用段と同形にして、終止段

練習

と連體段とも亦同形なり。又命令段にはいづれもよを含む。

一 動詞の六段の名稱及びその意味を述べよ。

二 動詞の六段の中、同形をなせるものを、各活用につきて一々説明せよ。

三 次の文にある動詞の活用及びび段を考へよ。

- (イ) 治上二格に上二格ゐ上二格て上二格亂下二格を下二格忘下二格れ下二格ず。
- (ロ) その將下二格を獲下二格ん下二格に下二格は下二格その馬上二格を射上二格よ。
- (ハ) 來加条件る四格もの四格は拒四格ま四格ず四格、去四格る四格もの四格は追四格は四格ず。
- (ニ) な四格せ四格ば四格な四格る四格な四格さ四格ね四格ば四格な四格ら四格ず四格、な四格る四格わ四格ざ四格を四格な四格ら四格ず四格と下二格す下二格つ下二格る下二格人下二格の下二格は下二格か下二格な下二格さ。
- (ホ) 躑躅四格を四格柴四格に四格折四格り四格添下二格へ下二格て下二格載下二格き下二格つ下二格れ下二格た下二格る下二格大原女四格も四格、い四格つ四格し四格か四格我四格が四格友四格と四格な四格れ四格り。
- (ヘ) 花四格に四格誘四格は四格れ四格て四格佛四格に四格詣四格で四格、佛四格に四格導四格か四格れ四格て四格花四格を四格見上二格る上二格客上二格け上二格よ上二格も上二格清上二格

口語四段活用

水觀音堂の前を四格み四格た四格し四格ぬ。

(ト) 人四格を四格相四格手四格に四格せ四格ず四格、天四格を四格相四格手四格に四格せ四格よ。

し、人四格を四格咎下二格め下二格ず下二格、我下二格が下二格誠下二格の下二格足下二格ら下二格ざる下二格を下二格尋下二格ね下二格へ下二格し。

天四格を四格相四格手四格に四格し四格て四格己四格を四格盡四格

第七章 口語動詞の活用及びび段

口語動詞の活用は文語動詞の活用と大同小異にして、四段か行變格さ行變格上一段下一段の五種あり。今左に之を示さん。

一、口語四段活用 文語の四段ら行變格な行變格の動詞は、口語にては、すべて四段活用となる。左の表を見よ。

口語四段	文語四段	活用	段
		成	將然連用終止連體
ら	ら	ら	ら
り	り	り	り
る	る	る	る
れ	れ	れ	れ
れ	れ	れ	れ

口語	文語	口語	文語
四段	變な 格行	四段	變ら 格行
死		有	
な	な	ら	ら
に	に	り	り
ぬ	ぬ	る	り
ぬ	ぬる	る	る
ぬ	ぬれ	れ	れ
ぬ	ぬ	れ	れ

人有り一人が有る
死ぬる人死ぬ人
死ぬれば死ぬば

即ち文語ら行變格の終止段有りは、口語にては有るとなりて四段活用に一致し、な行變格の連體段死ぬるは死ぬとなり、已然段死ぬれは死ねとなりて、是亦四段活用に一致するなり。

○口語動詞の第五段はすべて假定の意となる。以下皆之に倣へ。

二、口語か行變格活用 文語か行變格活用と終止段及び命令段に於て小異あり。左の表を見よ。

口語か行變格活用

口語	文語	活用
變か 格行	變か 格行	語幹 段
來		將然
こ	こ	連用
き	き	終止
くる	く	連體
くる	くる	假定(文)
くれ	くれ	命令
こい	こよ	

春く…春がくる。
早くこよ…早くこい

即ち文語の終止段くは、口語にてはくるとなり、命令段、こよはこいと異なる。

三、口語さ行變格活用 文語さ行變格活用と將然段及び終止段に於て小異あり。左の表を見よ。

口語さ行變格活用

口語	文語	語幹 段
變さ 格行	變さ 格行	爲
し	せ	將然
し	し	連用
する	す	終止
する	する	連體
すれ	すれ	假定(文)
せよ	せよ	命令

外出をせず…外出をせぬ
外出をす…外出をする

即ち文語の將然段せは口語にてはせ又はしとなり、終止段すはするとなる。

○口語は行變格の命令段には、前に述べたるせよの外にせいしるなどいふ語もあり。

四、口語上一段活用 文語の上一段・上二段の動詞は、口語にては、すべて上一段活用となる。左の表を見よ。

口語上一段活用		文語上一段		口語上一段		文語上一段	
起*	著	起*	著	起*	著	起*	著
さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ
さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ
さる	く	さる	さる	さる	さる	さる	さる
さる	くる	さる	さる	さる	さる	さる	さる
きれ	くれ	きれ	きれ	きれ	きれ	きれ	きれ
さよ	さよ	さよ	さよ	さよ	さよ	さよ	さよ

早く起くー早く起くる
起くる人ー起きる人
起くればー起きれば

口語下一段活用

即ち文語上二段活用の終止段起く連用段起くるは、口語にては共に起きるとなり、已然段起くれは起きれ(定假)となりて、全く上一段活用をなす。

○文語の起く起くるを口語にて起くるといひ、起くれを口語にてそのまゝに起くれといふ地方もあれど、用ひざるをよしとす。

五、口語下一段活用 文語の下一段・下二段の二活用は、口語にては、すべて下一段活用となる。左の表を見よ。

口語下一段活用		文語下一段		文語下一段	
起*	著	起*	著	起*	著
け	け	け	け	け	け
け	け	け	け	け	け
くる	ける	ける	ける	ける	ける
くる	ける	ける	ける	ける	ける
くれ	けれ	けれ	けれ	けれ	けれ
けよ	けよ	けよ	けよ	けよ	けよ

教を受く。教を受ける。
教を受くる人。教を受ける人。
教を受ければ。教を受ければ。

四口語の各行と文語の各行との異なる點を述べよ。

動詞活段對照表

文

語

口

語

活用

語例

將然

連用

終止

連體

已然

命令

語例

將然

連用

終止

連體

假定

命令

あ行にすはばり。有。居。倚。り。の。任。ぬ。死。ぬ。の。一。港。一。ま。す。お。ほ。す。い。段。に。お。す。は。ば。り。煮。煎。鑊。顧。慎。惟。か。る。用。の。事。々。々。

Table for the 'Wen' (文) column, containing columns for '活用' (活), '語例' (語), '將然' (將), '連用' (連), '終止' (終), '連體' (連), '已然' (已), and '命令' (命).

Table for the 'Kou' (口) column, containing columns for '活用' (活), '語例' (語), '將然' (將), '連用' (連), '終止' (終), '連體' (連), '假定' (假), and '命令' (命).

動詞は性質上、之を自動詞及び他動詞に分つ。
 一、自動詞 「火消ゆ」「水流る」の消ゆ・流るの如く、動作の主たる事物即ち火・水の外、別に動作を受くる目的の語を要せ

第八章 動詞の自他

- 二、口語中終止段と連體段と其の形を異にせるものありや、
 六、次の文に於ける動詞を指摘し、且、その活用及び段を示せ。
- (イ) 一艦でも田^下て來^下たら目に物見せてくれるぞ。
 - (ロ) 今の内によく勉強して、立派な人になり、然るべき地位を得た曉には、志を天下に行ふことも出来るのである。
 - (ハ) 四方の山から絶えず涌き出る清水は縦横に小さな流をなして、鮎のはしる二つの川に落ち合ふ。
 - (ニ) 兎角世間の人は、事業の成功する前にはや根氣が盡きて疲れしてしまふから、大事が出来ぬのだ。

他動詞

ざる動詞をいふ。
二、他動詞 「小兒獨樂を廻す、生徒本を讀む」の廻す、讀むの如く、動作の主たる小兒、生徒の外に、動作を受くる目的の語即ち獨樂、本等を加へて、文意の始めて通ずる動詞をいふ。

○他動詞は多く、何々をといふ語を受く。但し、文(を)讀む、窓、此の枝(を)折るべからず、などの如く、をを略することあり。又、道(を)歩む、門(を)入る、の歩む、入るの如く、自動詞にしてをを受くるものあり。

動詞には自動詞のみにて之に對する他動詞なきものあり、又他動詞のみにて之に對する自動詞なきものあり。又、自他に、よりてその活用を異にするものあり。左に之を略説す。

自動詞のみの動詞

一、自動詞のみの動詞

眠る 有り 死ぬ など。

他動詞のみの動詞

二、他動詞のみの動詞

打つ 殺す 送る など。

自他同形の動詞

三、自他同形の動詞

増す (さ行四段) …… 水増す。(自) 水を増す。(他) ぐしすすせせ

閉づ (た行上二段) …… 門閉づ。(自) 門を閉づ。(他) ちぢづ、つる、るんぢ。

垂る (ら行下二段) …… 尾垂る。(自) 尾を垂る。(他) れ、れ、る、る、る、る、れ、れ。

四、語幹同じくして、自他その活用を異にせる動詞

語幹同じくして、自他その活用を異にせる動詞

育つ (た行四段自) 子育つ。 ヲ、ケ、ワ、ツ、テ、ア、
 (た行下二段他) 母子を育つ。 テ、ニ、ツ、フ、ル、ワ、レ、テ、

延ぶ	ば行上二段(自)	命延ぶ。	ヒヒウフンフレヒ
	ば行下二段(他)	命を延ぶ。	ヘハフフンフレヘ
解く	か行下二段(自)	氷解く。	ケケケケケケケケ
	か行四段(他)	紐を解く。	ウキウケケケケケ
足	ら行四段(自)	衣食足る。	
	さ行四段(他)	衣食を足す。	
流	ら行下二段(自)	水流る。	
	さ行四段(他)	水を流す。	
見	や行下二段(自)	月見ゆ。	
	ら行上一段(他)	月を見る。	
癒	や行下二段(自)	病癒ゆ。	
	さ行四段(他)	病を癒す。	
動	か行四段(自)	心動く。	
	さ行四段(他)	心を動す。	
盡	や行上二段(自)	力盡く。	
	さ行四段(他)	力を盡す。	

及ぶ ば行四段(自) 徳禽獸に及ぶ。
 及ぶ ば行四段(他) 徳を禽獸に及す。

すべてものをいひ文を綴る場合には、動詞の自他を誤らぬやう心せざるべからず。

練習

- 一 自動詞とは何ぞ。
 - 二 他動詞とは何ぞ。
 - 三 自動詞のみの動詞及び他動詞のみの動詞を挙げよ。
 - 四 自他同形の動詞を知れる限り示せ。
 - 五 語幹同じうして自他その活用を異にせる動詞を示せ。
 - 六 次の文より動詞を指摘し、且その自他を分て。
- (イ) 人若うしては學ばんことを願ひ、老いては教へんことを欲す。

- (ロ) 花咲く春のあけぼのを、はやとく起きて見よかしと、鳴く鶯も心して、人の夢をぞさましける。
- (ハ) 心こゝにあらざれば、視れども見えず、聴けども聞えず、食へどもその味を知らず。
- (ニ) 凡そ蠶を養ふや、夙に起き、夜に寝ね、桑葉を摘み、汚物を除くはいふも更なり、或は室を温暖にし、或はこれを清涼にし、水を撒きて乾燥を防ぎ、火を焚きて濕氣を防ぐなど、片時も注意を怠るべからず。

七 次の動詞に自他の誤あらば、之を正せ。

- (イ) 塵もつもりて山となす。
- (ロ) 小事を以てその心を動くことなかれ。
- (ハ) 一同聲を描ひて萬歳を三呼す。
- (ニ) 日を暮れ、夜を明かす。
- (ホ) 舟を浮べて月を中流に賞す。

動詞の音便

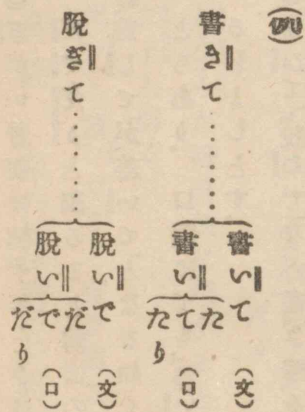
ゝ音便

第九章 動詞の音便

動詞の語尾がて(口語にてはたてたり)につゞく時には、發音の便宜により、時として他の音に轉ずることあり。之を動詞の音便といふ。

動詞の音便には次の四種あり。

一、い音便 か(が)行四段活用動詞の語尾なるき(ぎ)がいに轉ずるものをいふ。



○ぎがい音便に轉ずるときは、次に來るて(文)はでと濁りたり(口)はだでたりと濁ること前例の如し。

○差してが差いてとなる如く、稀に動詞の語尾なるしがいに轉ずることもあり。口語にても、差いて起いてなどいふ地方もあれど、用ひざるをよしとす。

○書ひて脱ひでなど書き誤ることなかれ。

二、う音便 は行四段活用動詞の語尾なるひがうに轉ずるものをいふ。

(例)

問ひて………
問うて (文)
問うたり (口)

○問ふてなど書き誤ることなかれ。

三、撥音便 へ行ば行ま行四段活用動詞の語尾なるにび

撥音便

う音便

みが撥音んに轉ずるものをいふ。

(例)

死にて………
死んで (文)
死んだり (口)

呼びて………
呼んで (文)
呼んだり (口)

讀みて………
読んで (文)
讀んだり (口)

○にびみが撥音便に轉ずるときは、て(文)はでと濁りたり(口)はだでたりと濁る。

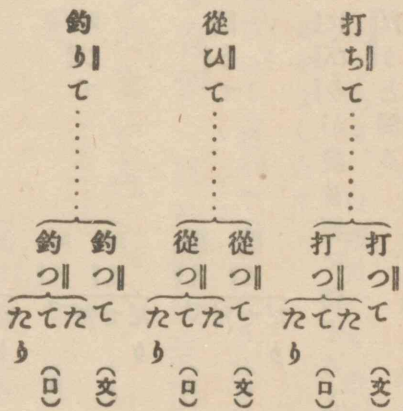
○死ひで、讀ひでなど書き誤ることなかれ。

四、促音便 へ行は行ら行四段活用動詞の語尾なるひら

促音便

りが促音に轉ずるものをいふ。

(例)



練習

- 一 音便とは何ぞ。
- 二 動詞の音便を類別し、且、之を例解せよ。
- 三 口語動詞の音便と文語動詞の音便との相違點を示せ。

動詞の語尾の假名遣

四 次の文にある動詞の音便を指摘し、且、その種類と原音とを示せ。

- (イ) 勝つて胃の緒を締めよ。 促 勝ちて。
- (ロ) 注いでは大瀧の水となり、凝つては百鍊の鐵となる。 促 注ぎ。
- (ハ) 進んでは忠を盡さんことを思ひ、退いては君の過を補はん。 促 進退。

(ニ) 壺割つて仕舞うてからは、何いうても詮ない事ぢや。

第十章 動詞の語尾の假名遣

動詞の語尾ひいゐ、ふゆう、へえゑ、づず等の假名は紛らはしきものなり。

- 問ひて 老いて 率ゐて
- 強ふ 報ゆ 餓す
- 教へて 消えて 植ゑて

出づ 交す

かゝる假名を正しく使ひ分くることを動詞の語尾の假名遣といふ。動詞の語尾の假名遣を明かにせんには、左の諸法によるを要す。

一、その動詞の活用を明かにすること。

例へば、堪がは行の下二段に活用し、絶がや行の下二段に活用すること。を知らば、直ちに堪え、堪ゆが堪へ、堪ふの誤なること、絶へ、絶ふが絶え、絶ゆの誤なることを知り得べきが如し。

二、その動詞の語幹を明かにすること。

例へば、支ふ、誘ふの假名遣を知らんとするに當り、先づ之を活用せしめてその語幹を明かにせば、直ちに支ふはさゝふにして、誘ふはさそふなることを知り得べきが如し。

三、少なき方の活用並に假名遣を記憶して、他の多き方を

推知すること

例へば、交すがざ行下二段活用の唯一の動詞なることを記憶すれば、その他の出づ、詣づ、撫づ、秀づ、撞んづ等は、何れも皆だ行下二段活用なるを推知すべきが如し。

今参考の爲誤り易き動詞の重なるものゝ活用を左に示さん。

一、四段活用 四段活用に於て誤り易きは、買ふ、思ふ、問ふ、叶ふ等の如く、は行に活用する動詞のみ。此の活用に於ては、わ行に活用するものなし。故に前の諸動詞の如く、わ行四段に聞ゆるものは、一切は行四段活用に於ては、はひ、ふへの假名を用ふるものと知るべし。

二、上二段活用 此の活用に於て誤り易きは、だ行は行や行

の三活用なり。今その重なるものを左に示さん。

○ だ行上二段…怖^ホ綴^ゾ閉^ヘ恥^チ攀^{パン}…ぢづづるづれ

○ ざ行上二段活用はなし。

は行上二段…生^シ戀^コ強^コ誣^ソ…ひふるふれ

や行上二段…老^ロ悔^ケ報^ホ酬^ウ…いゆるゆれ

三、下二段活用 此の活用にて誤り易きは、あ行・ざ行・だ行は行・や行・わ行などの諸活用なり。今その重なるものを左に示さん。

ざ行下二段…交^{カウ}…ぜずるずれ

だ行下二段…出^イ撫^フ秀^{シウ}詣^キ愛^{アイ}…でづるづれ

や行下二段…瘧^マ覺^{カク}消^{シヨウ}開^{カウ}肥^ヒ越^{コウ}凍^{トウ}…えゆるゆれ

わ行下二段…殖^{シヨク}吹^{フイ}謁^{ケツ}見^{ケン}燃^{ネン}萌^{メイ}…えゆるゆれ

○ 下二段活用の中は、行の動詞はや行・わ行に比すればその数頗る多く、總計八十餘語あり。一々擧ぐるに遑あらず。故にや行・わ行に屬する重なる語を記憶し、その他は大抵は行なりと心得べし。

練習

一 だ行や行兩上二段活用に屬する重なる動詞を示せ。

二 ざ行・わ行兩下二段活用に屬する重なる動詞を示せ。

三 次の文に假名遣の誤あらば、之を正せ。

- (イ) 怨に報うるに徳を以てす。 シ、
- (ロ) 百年の計は徳を樹ゆるにあり。 ワ、イニ
- (ハ) 餓え凍ゆとも、武士の體面を傷つけじ。 ワ、下ニ、ヤ、下ニ
- (ニ) 砲臺を構ゑ、大砲を据えつく。 ヤ、下ニ、ロ、下ニ
- (ホ) 望絶へて、不安の念に堪へず。 ヤ、下ニ
- (ヘ) 年老ひて後、悔ゆとも詮なし。
- (ト) 大に恥じて、眼を閉づ。 カ、上ニ

形容詞の活用

形容詞も亦その語尾を變化す。今高しといふ形容詞につきてその一例を示さん。

第十一章 形容詞の活用

- (チ) 高く聳へたる山を越えつゝ進む。
- (リ) 春雪漸く消えて草木萌へ出す。
- (ヌ) 夜ふけ月冴へて犬の吠ゆる聲しきりに聞えけり。

く……山高く、水長し。

し……山高し。

き……高き山を越ゆ。

けれ……山高ければ眺望に富む。

語幹
語尾
活用

右の中、たかの如く變化せざる部分を語幹といひ、くしきけれの如く變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といふ。

第一類の活用

形容詞の活用には左の二類あり。

一、第一類の活用 前例の高し及び青し深し等の如く、語幹の最後の音し又はじにあらず、且くしきけれと活用するものをいふ。左の表を見よ。

語幹例	語	尾
高	く	けれ
青	し	
深	き	

第二類の活用

二、第二類の活用 美し同じ等の如く、語幹の最後の音し又はじにして、きけれと活用し、しの語尾を缺くものをいふ。左の表を見よ。

語幹例	語	尾
美	く	けれ
同	〇	
じ	き	

口語形容詞の活用

◎第二類の形容詞の中、語尾を缺けるところは、語幹をそのままに用ふ。口語にては、第一類と第二類との別なく、く、い、けれと活用すること左表の如し。

高	語幹例	語	尾
美	く	い	けれ

練習

- 一 形容詞の語幹語尾を説明せよ。
- 二 形容詞の活用の種類を問ふ。
- 三 文語形容詞と口語形容詞との活用の異同を述べよ。
- 四 次の文に於ける形容詞を指摘し、且その活用を示せ。
 - (イ) 山けはしく、水清く、松青く、沙白し。
 - (ロ) 近き舟は行けども、遠き帆影は動かんともせず。

形容詞の段

形容詞も亦將然連用終止連體已然等の諸段を有せり。今清し、美しの二語につきて左に其の例を示さん。

第一段 將然段

清く……飲料に供せん。
 美しく……花美しくば、手折りて瓶に挿さん。

清く……水清く澄む。
 美しく……花美しく咲く。

第二段 連用段

第三段 終止段

清し……水清し。
美し……花美し。

第四段 連體段

清き……清き水を掬ふ。
美しき……美しき花を手折る。

第五段 已然段

清けれ……水清ければ、飲料に供す。
美しけれ……花美しければ、手折りて瓶に挿す。

今之を表にて示せば左の如し。

活用	語幹例	將然	連用	終止	連體	尾
第一類	清	く	く	し	き	けれ
第二類	美	く	く	○	き	けれ

○形容詞の將然段と連用段とは同形なり。

○形容詞の連用段は、時として中止の意となる、山高く、水深し、行正しく、徳高し、の高く、正しくは此の例なり

○形容詞の連體段は、時として次に來る體言を省略することあり。徳

形容詞の連用段と動詞ありとの結合

形容詞の連用段と動詞ありとの結合

○形容詞には命令段なし。

形容詞の連用段は、動詞ありと結びつきて、ら行變格活用となる。次の例を見よ。

清くあら 清くあり 清くある 清くあれ
美しくあら 美しくあり 美しくある 美しくあれ

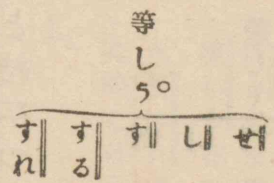
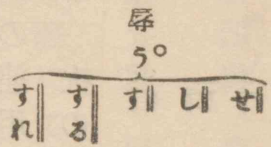
形容詞の連用段は、又、動詞すと結びつきて、さ行變格活用となる。次の例を見よ。

清く
すれ する すら し せ

美しく
すれ する すら し せ

形容詞のう音便

此のくは又う音便にてうに轉ずることあり。左の例を見よ。



形容詞のい音便

形容詞の連體段の語尾きは、又い音便にていに轉ずることあり。次の例を見よ。

善[○]さかな……善[○]いかな。
悲[○]しきかな……悲[○]しいかな。

口語にては「水が清^い」清^い水。「花が美^{しい}」美^{しい}花の如く

口語形容詞の段

終止連體の二段同じ形になりて、第一類第二類の區別全く不用となる。左の表を見よ。

語幹		清		終止連體		已然(文) 假定(口)
		口	文	口	文	
く	口	く	く	い	い	けれ
	文	く	く	い	き	けれ
し	口	く	く	い	い	けれ
	文	く	く	い	き	けれ

○文語形容詞の已然段は、口語にては轉じて假定の意となる。
練習

- 一 形容詞の段を説明せよ。
- 二 形容詞の音便の種類及び用例を示せ。
- 三 次の語を説明せよ。

多かり。空しうす。

四 文語形容詞と口語形容詞との異同を明かにせよ。

二 次の文に於ける形容詞を指摘し、且その活用及び段を示せ。

(イ) 長く住めば、都會の生活には苦勞多く、不愉快多し。

(ロ) 道遠くば車にて行くべく、近くば徒歩にて行くべし。

(ハ) 人は交はる友により、善きに悪しきにうつるなり。

(ニ) はでなる娛樂こそ田舎住居に乏しけれ、衛生上その他の危険なきは、その失を償うて餘りあるべし。

(ホ) 世間は年中いそがしく、さわがしく、街路は朝に晩に雜沓す。

都會が衛生に宜しからざるは明白なり、まして、火災などの害も都會に多かるをや。

(ヘ) 低き家、狭き町、淋しき松繩手、丈高き稻の穂鼻の先に並びたる連山、をさなき頃より見なれたる一軒家、皆莞爾として我を迎ふるが如く、何れなつかしからぬはなし。

助動詞の種類

時の助動詞

- (ト) あやにたふときすめらぎの、あやにかしこきすめらぎの、あやにたふとくかしこくも、下し賜へり、大御言。
- (チ) 櫻の花は空青く水清い日本の風土に最もよく釣合つて、深山市中、どこにあつても皆よろしい。
- (リ) どんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない日和を花曇といふ。夜は照りもせず曇りもはてぬ朧月夜雲霞とまがふ花には最もふさはしい景色である。

第十三章 助動詞の種類及び活用 その一

助動詞はその動詞に添ひてあらはす意義によりて、之を時・打消・推量・受身・可能・使役・尊敬・指定・詠歎・希望・比説の十一種に大別す。今次に之を略説せん。

一、時の助動詞 時の助動詞は、動作の行はるゝ時を示すものにして、之に過去・未來・完了の三種あり。

過去
未來
完了

過去の助動詞はきけりの二語にして、動作の今より前に起りしことを示し、未來の助動詞はむの一語にして、動作の今より後に起るべきを示し、完了の助動詞はつぬたりりの四語にして、動作の已に終れる意を示す。その用例左の如し。

過去…昨日大雪降りけりけりしけりし

未來…明日は大雪降りむむめ

完了…大雪降りてつるつれぬれぬれ
大雪降りたるたれ
大雪降りたるたれ

現在の時

○用例の下にあるはその活用なり。以下皆之に倣へ。
○現在の時は別に助動詞を用ひず、動詞そのまゝにてあらはさる。

進行的現在

○たりりは、花咲きたり、我が宿に大雪降りりなどの如く用ひて、動作の繼續して進行することをあらはすことあり。之を進行的現在又は繼續的現在といふ。

恆の時

○水は卑きに就く、雨降つて地固まるの如く、真理習慣等をあらはすには、現在の形を用ふ。通例之を恆の時といふ。

打消の助動詞

二、打消の助動詞 ずざりじまじ等の如く、動作を否定する助動詞をいふ。

(例)
雪 降るまじ 降らざり 降らざらざり 降らざらざれ
降るまじ 降らざり 降らざらざり 降らざらざれ
降るまじ 降らざり 降らざらざり 降らざらざれ

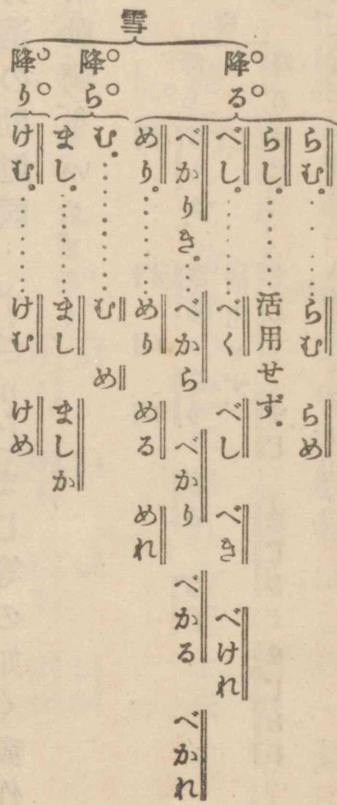
○じまじは推量して否定するに用ふ。

推量の助動詞

三、推量の助動詞 らむらしべしべかりめりむましけむ

の如く、事實を推量する意に用ふる助動詞をいふ。

(四)



○けむは過去の事實を推量するに用ふ。

○らむむけむはらんけんと發音し従つてらんけんとも書す。

四、受身の助動詞 次の例のるるの如く、動作を他よりしかけらるゝ意を示す助動詞をいふ。

犬猫に追はるる... 馬丁、馬に蹴らるる...

可能の助動詞

五、可能の助動詞 次の例のるるべしべからの如く、そのものゝ力にてなし得る意を示す助動詞をいふ。

一時間に二里は走らるる...

此の間には我も答へらるる...

千引の岩もくたくべし...

美しさ名状すべからず...

べし他の用法

○べしは推量可能の外、子たるものは親に孝なるべし... 命令の意に用ふることあり、今後は断じて過を再びせざるべし...

自發の助動詞

○るるは、子の行末思ひやらるる父の身の上案ぜらるるの如く、動作の自ら起りて止め難き意に用ふることあり、かゝる場合には、之を自發の助動詞といふ。

練習

- 一 時の助動詞を列挙し、且、その活用を示せ。
- 二 打消の助動詞の種類及び活用を示せ。
- 三 推量の助動詞の種類及び活用を示せ。
- 四 受身の助動詞と可能の助動詞とを説明せよ。
- 五 例を示して、べし^レのあらゆる用法を説明せよ。
- 六 まじけむらむの用例を示せ。
- 七 次の文の中なる既習の助動詞を指摘し、且、之を類別せよ。
 - (イ) 若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。
 - (ロ) 朝は水澄めれば、底の真砂も數へつべし。
 - (ハ) 朝餐に列なれる人の、一人も缺けず、一日の務を終へて集りたる、嬉しからずといはんや。
 - (ニ) 此の兒、利根こそ生れつきたらめ、なほ幼くして、その氣根のほどもはかりがたく、家富めりとも見えねば、黄金の事心得られず。

使役の助動詞

（ホ）冬に至りぬれば、日短くなりて、課もまだ満たざるに、日暮れんとすることたびくにて、西向なる竹縁の上に机を持ち出でて書き終へぬる事もありき。

（ヘ）十一歳の秋また課を立てられて庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて十日のうちに淨寫して參らすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、冊になして戸部に見せまゐらす。褒めたまふこと大方ならず。

第十四章 助動詞の種類及び活用 その二

六、使役の助動詞 次の例のす^レさ^レす^レし^レむの如く、他をして動作をなさしむる意を示す助動詞をいふ。

下男に水を汲 <small>ま</small> す ^レ ……	す ^レ ……	す ^レ ……	す ^レ ……	す ^レ ……
下男に水を汲 <small>ま</small> しむ ^レ ……	しむ ^レ ……	しむ ^レ ……	しむ ^レ ……	しむ ^レ ……
下婢に塵を捨 <small>す</small> て	さす ^レ ……	さす ^レ ……	さす ^レ ……	さす ^レ ……

尊敬の助動詞

七、尊敬の助動詞 次の例のる。らる。す。さすの如く、他の動作を敬ふ意を示す助動詞をいふ。

父上はよく字を書かる。(受身のるの活用に同じ)

先生は本日缺席せらる。(受身のらるの活用に同じ)

皇子殿下には學習院に御通學あらせらる。(使役のすの活用に同じ)

皇后陛下には濱離宮に行啓せさせ給ふ。(使役のさすの活用に同じ)

天皇陛下には觀艦式に臨ましめ給ひき。(使役のしむの活用に同じ)

○尊敬のせ。させ。しめは單獨に用ふることなく、助動詞らる。又は動詞た。まふと結合するを常とす。

○尊敬の助動詞は、又崇敬の助動詞ともいふ。

指定の助動詞

八、指定の助動詞 次の例のなり。たり。の如く、事物を指定する意を示す助動詞をいふ。

艱難は我が師なり。……なら。なり。なる。なれ
運動も勉強もするなり。

我は我たり………完了のたりの活用に同じ

○指定の助動詞は名詞代名詞につくを常とす。

詠歎の助動詞

九、詠歎の助動詞 次の例のなり。けり。の如く、感動の意を示す助動詞をいふ。

秋の野に人まつ松の聲すなり。……なり。なる。なれ
ふり行くものは我が身なりけり。……けり。ける。けれ

○指定のなりは名詞代名詞又は動詞形容詞の連體段より受け、詠歎のなりは動詞助動詞の終止段より受く。

希望の助動詞

一〇、希望の助動詞 次の例のたし。まほし。の如く、動作をなさんことを望む意を示す助動詞をいふ。

花見に行きたし。……たく。たし。たき。たけれ
行かまほし。……まほしく。まほし。まほしき。まほしけれ

比説の助動詞

一一、比説の助動詞 次の例のごとしの如く、事物を比較説明する意に用ふる助動詞をいふ。

歳月は流るゝごとし...ごとく ごとし ごとき

○ごとしは、月色銀のごとし、落花蝶の舞ふがごとしの如く、助詞のがに連なることあり。

練習

一 使役の助動詞の種類及び活用を示せ。

二 尊敬の助動詞を説明せよ。

三 指定の助動詞と詠歎の助動詞とを説明せよ。

四 たしまほしごとしの三つの助動詞の用法及び活用につきて知るところをいへ。

五次の文に於ける助動詞を指摘し、且、その活用を示せ。

(イ) 旅行したきは山々なれど、父上の許させ給はぬをいかにせ

身受	可	能	使役	尊敬	敬	定指	歎詠	望希	比説
る	る	べし	す	す	しむ	なり	なり	たし	ごとし
れ	れ	べから	せ	せ	しめ	なら		たく	ごとく
れ	れ	べかり	せ	せ	しめ	なり		たく	ごとく
る	る	べし	す	す	しむ	なり	なり	たし	ごとし
る	る	べかり	す	す	しむ	なり		まほし	ごとく
る	る	べし	する	する	しむる	なる	なる	たき	ごとき
る	る	べかり	する	する	しむる	なる	なる	まほしき	ごとき
れ	れ	べかれ	すれ	すれ	しむれ	なれ	なれ	たけれ	
れ	れ	べかれ	すれ	すれ	しむれ	なれ	なれ	まほしけれ	
れよ	れよ		せよ	せよ	しめよ	なれ	なれ		
れる	れる	られる	せる	せる	させる	なれる	なれる	だい	
れ	れ	られ	せ	せ	させ	なれ	なれ	(たから)	
れ	れ	られ	せ	せ	させ	なれ	なれ	(たかつ)	
れる	れる	られる	せる	せる	させる	なれる	なれる	たい	
れる	れる	られる	せる	せる	させる	なれる	なれる	たい	
れ	れ	られ	せれ	せれ	させれ	なれ	なれ	たけれ	
れよ	れよ		せよ	せよ	させよ	なれ	なれ		

(イ) 旅行したきは山々なれど、父上の許させ給はぬをいかにせ

助動詞活段對照表

△は古文にのみ用ひらる。
□は係結の時にのみ用ひらる。

尊	役使	能	可	身受	量	推	消	打	時			種類									
									來未	了完	去過										
らる	しむ	さす	べかり	らる	らる	けむ	まし	むり	べかり	べし	らし	む	まじ	ざり	む	りた	ぬつ	けり	き	本形	
られ	しめ	させ	べから	られ	られ								まじく	ざら		ら△た	なて	け△ら		將然	
られ	しめ	させ	べかり	られ	られ								まじく	ざり		り△た	にて	け△り		連用	
らる	しむ	さす	べし	らる	らる	けむ	まし	むり	べし	らし	む	まじ	じ	ざり	む	りた	ぬつ	けり	き	終止	
らる	しむ	さす	べかり	らる	らる	けむ	まし	むり	べかり	らし	む	まじ	じ	ざる	む	る	た	ぬつ	ける	し	連體
らる	しむ	さす	べかり	らる	らる	けむ	まし	むり	べかり	らし	む	まじ	じ	ざれ	め	れ△た	ぬれ	つれ	けし	しか	已然
られ	しめ	させ		られ	られ									ざれ			ねて	よ			命令
られる	させる	せる	られる	られる	られる	よう	う		らしい	まい	ない	ぬ	よう	た	た						本形
られ	させ	せ	られ	られ	られ				(らしいから)		(なくから)	ざ		たら	たら						將然
られ	させ	せ	られ	られ	られ				(らしいかつ)		(なくかつ)	ざ		て	て						連用
られる	させる	せる	られる	られる	られる	よう	う		らしい	まい	ない	ぬ(ん)	よう	た	た						終止
られる	させる	せる	られる	られる	られる	よう	う		らしい	まい	ない	ぬ(ん)	よう	た	た						連體
られ	させ	せ	られ	られ	られ						なけれ			(たら)	(たら)						假定
られ	させ	せ		られ	られ																命令

文 語 口 語

助動詞活段對照表

△は古文にのみ用ひらる。
□は係結の時にのみ用ひらる。

種類	時				打	消	推	量	身受	可	能	使役	尊	敬	定指	歎詠	希望	説比						
	來未	了	完	去過																				
本形	む	り	た	ぬ	つ	け	ま	む	め	べ	ら	ら	ま	じ	ざ	ず	む	り	た	ぬ	つ	け	き	
將然		ら	た	な	て																			
連用		ら	た	に	て																			
終止	む	り	た	ぬ	つ	け	ま	む	め	べ	ら	ら	ま	じ	ざ	ず	む	り	た	ぬ	つ	け	き	
連體	む	る	た	ぬ	つ	ける	まし	む	める	べ	ら	ら	ま	じ	ざ	ぬ	む	る	た	ぬ	つ	ける	し	
已然			れ	た	れ	し	め	まし	め	べ	ら	ら	ま	じ	ざ	ね	め	れ	た	ぬ	つ	けれ	し	
命令				て	よ																			
本形			た				よう		らしい		まい	ない	ぬ	よう	た	た								
將然			たら						らしい			ない	たら		たら	たら								
連用									らしい			ない												
終止			た				よう		らしい		まい	ない	た	よう	た	た								
連體			た				よう		らしい		まい	ない	た	よう	た	た								
假定												なけれ												
命令																								

文

語

口

語

種	形	類	時		
			夜	日	行
本形	け	し	ひ	り	つ
	ひ	し	り	つ	け
本形	か	し	す	ず	ず
	か	し	す	ず	ず
本形	か	し	す	ず	ず
	か	し	す	ず	ず
本形	か	し	す	ず	ず
	か	し	す	ず	ず
本形	か	し	す	ず	ず
	か	し	す	ず	ず
本形	か	し	す	ず	ず
	か	し	す	ず	ず
本形	か	し	す	ず	ず
	か	し	す	ず	ず
本形	か	し	す	ず	ず
	か	し	す	ず	ず
本形	か	し	す	ず	ず
	か	し	す	ず	ず
本形	か	し	す	ず	ず
	か	し	す	ず	ず
本形	か	し	す	ず	ず
	か	し	す	ず	ず

ん。

(ロ) 父は父たらずとも、子は子たらざるべからず。

(ハ) 男のすなる日記といふものを、女もして見んとてするなり。

(ニ) さこそ侍るべけれど、太刀使ふ事少しも心得ざらんには、刀

脇差腰にせんこと、誠に不用の事にや、といひしかば、のたま

ふところまことに然なり、とて、傳へて習はしめたり。

(ホ) 人の子たらんものは、重盛がその父に對するごとくあらま

ほしきものなり。

(ヘ) 明けの年の秋、また國に往きたまひしあとにて、課を立てら

れて、日のうちには行草の字三千、夜に入りて一千字をかぎ

りて書き出すべしと命ぜられたり。

(ト) 兩陛下には仁慈の御心に富ませられ、今回の臺灣の風水害

を聞し召して、いたく大御心を惱ましめ給ひ、内帑の金三萬

圓を下して窮民を賑恤せさせらる。

口語助動詞の種類

時の助動詞
過去
完了
未來

打消の助動詞

第十五章 口語助動詞の種類及び活用

口語助動詞は文語助動詞に比すればその種類や、少ない。通常之を時・打消・推量・受身・可能・使役・尊敬・指定・希望の九種に分つ。左に之を略説せん。

一、時の助動詞 是に過去及び完了を示すたと未來を示すう・ようとあり。次の例を見よ。

昨日大雪が降った。(過去) たら たら たれ
先程風が静まつた。(完了)

雨はやがて止まう。(未來) 活用せず
もうぢきに空が霽れよう。(未來) 活用せず

○用例の下に記せるはその活用なり。以下皆之に倣へ。

二、打消の助動詞 次の例のぬないなかつまいの如きをいふ。

風が吹かぬ……すぬぬ
ない……なく ない なけれ
なかつた……なから なかつ
風は吹くまい……(活用せず)

○ぬはんと發音するを常とし従つてんとも書す。
○まいは推量して打消す助動詞にして、文語のまじにあたる。

三、推量の助動詞 次の例のう・よう・らしいの如きをいふ。

明日は多分風が吹かう……(活用せず)

今夜は友達が尋ねて来よう……(活用せず)

どうやら雪が降るらしい……らしくらしい

○う・ようは文語のむにあたりらしいはらしにあたる。

○文語のけひの意は、口語にてはたらうの二語を連ねて之をあらはす。

四、受身の助動詞 次の例のれるられるの如きをいふ。

猫が犬に追はれる……れる れい。

受身の助動詞

推量の助動詞

可能の助動詞

馬丁が馬に蹴られる。…られ られる られい
○れるは文語のるにあたりられるはらるにあたる。

五、可能の助動詞 次の例のれるられるの如きをいふ。

一時間に二里は走られる。…(受身のれるの活用に同じ)
此の問には我も答へられる。(受身のられるの活用に同じ)
○此のれるのれは四段活用動詞の將然段と結びつきて一音に約まることあり。例へば、讀まれるが讀めるとなるが如し。

使役の助動詞

六、使役の助動詞 次の例のせるさせるの如きをいふ。

下男に水を汲ませる。…せ せる せれ
下婢に塵を捨てさせる。…させ させる させれ
○せるは文語のすにあたりさせるはさすにあたる。
○させるがさ行變格のせにつくときはせとさとがさと約まりて、させるとなる。例へば、かはゆい子には旅をせさせるの如し。

尊敬の助動詞

七、尊敬の助動詞 次の例のれるられるの如きをいふ。

父上はよく字を書かれる。(受身のれるの活用に同じ)
先生は今日出席せられる。(受身のられるの活用に同じ)
○られるがさ行變格のせにつくときはせとらとがさと約まりて、されるとなる。例へば、兄上は齒痛で困難せられるの如し。

對話の助動詞

右の外、此の類の助動詞にますあり。左の例を見よ。
私は今日缺席します。…ませ まし ます (まする) ますれ
此のますは動作の主に對する尊敬にあらざして、話の相手に對する尊敬を示す。故にこれを對話の助動詞ともいふ。

指定の助動詞

八、指定の助動詞 次の例のだですの如きをいふ。

此の本は私のだ。…だら だつ だ
です。…でせ でし です

希望の助動詞

前途は有[○]望[○]だ^{||}です。

○だは訛りてぢやとなることあり。

九、希望の助動詞 次の例のたいたからの如きをいふ

散歩がし[○]たい……たく^{||}たい^{||}たけれ
たからう……たから たかつ

練習

一口語助動詞の主要なるものを列挙し、且、その活用を示せ。

二次の文に於ける助動詞を指摘し、且、その種類と活用とを記せ。

- (イ) 雨は降るだらう、併し風は吹くまい。
- (ロ) 雨がやんだら散歩に出かけようと思つてゐます。
- (ハ) 苟も國運の發展をはからうとするには、國民が常に元氣をひき立て、倦まないといふやうに努めていかなければならぬ。

(ニ) 言ひたい事は由々ございますが、何分口不調法ですから、これで御免を蒙りたいと思つて居ます。

(ホ) 長男は農學校を卒業させて實業に就かせ、次男は海軍兵學校に入學させて海軍士官にした。

(ヘ) 明治天皇は去る三十七年の冬以來、御かくれ遊ばすまで、如何なる嚴寒にも一切ストロブを御用ひ遊ばさなかつたとの事でございます。これは、當年皇軍が滿洲の野に大敵と戦ひ、飢寒に苦しんでゐるに御同情を垂れさせられ、兵士と艱苦を共にしようとの大御心に出でさせられた次第であらうと申すことでございます。

(ト) 自分はまだ新參ものでありましたから、此度のクリスマスについて、さほど贈り物の心配はいりませんでした。が、それでもこの祭には、前夜及びその晩とも招待されて手厚い饗應を受け、兎に角に家庭に於けるクリスマスの景況を一通

り見ることが出来ました。

第十六章 助動詞の段

助動詞の段

助動詞も亦、將然、連用、終止、連體、已然等の諸段を有せり。而してその活用の動詞に類するものは動詞に照して考ふることを得べく、その活用の形容詞に似たるものは形容詞に照して考ふることを得べし。今、ぬたしせる (口) の三助動詞につきて之を略説せん。

やがて花も咲きなん。 な、に、ぬ、ぬる、ぬれ、ぬ

水泳に行きたくば行け。 たく、たく、たし、たき、たけれ、

兎狩に子供を行かせよう。 (口) せ、せ、せる、せる、せれ、せよ

右のなたくせは將然段なり。

花咲きにけり。

連用段

水泳に行きたく思ふ。

兎狩に子供を行かせた。 (口)

右のにたくせは連用段なり。

花咲きぬ。

水泳に行きたし。

兎狩に子供を行かせる。 (口)

右のぬたしせるは終止段なり。

花咲きぬる日。

水泳に行きたき心地す。

兎狩に子供を行かせる親。 (口)

右のぬるたきせるは連體段なり。

花咲きぬれば、見に行きぬ。

水泳に行きたければ、出で行きつ。

已然段(文)
假定段(口)

右のぬれ。たけれは已然段にして、せれは假定段なり。

○此の段は、口語にては假定の意となる。故に通例之を假定段といふ。
花見に行きぬ。

兎狩に行かせよ。

命令段

右のね。せよは命令段なり。

○形容詞に似たる活用を爲す助動詞には命令段なし。

なほ助動詞の各段につきては、別表を参照すべし。

練習

一例を示して助動詞の段を説明せよ。

二次の文に於ける助動詞を指摘し、且その種類及び段を示せ。

(イ) 知らぬことは知らずと答ふべし。

(ロ) 過ぎたるはなほ及ばざるがごとし。

(ハ) 金剛石もみがかずば、玉の光はそはざらん。

(ニ) 秋のはじめになりぬれば、ことしもなかばは過ぎにけり。

(ホ) 大禹は聖人なれども寸陰を惜みき。衆人に至りては、當に

分陰を惜むべし。

(ヘ) 朝餐に列なれる人の、一人も缺けず、一日の務を終へて集り
たる、嬉しからずといはんや。

(ト) あなかして、これ世の常の事に用ふべからず。汝が夫の一
大事あらん時に參らせよとて、父の給ひし黄金にこそ。

(チ) 彼が立てた此等の功績は、千歳なほ朽ちぬであらう。(口)

(リ) 英國の上流社會が腐敗せぬのは、畢竟運動が盛な結果だと
いふことです。(口)

(ヌ) 君が代の喇叭の聲は、恰も陛下が御身親ら前へと號令を
下し遊ばされるかの如くに感ぜられて、將卒の勇氣が百倍
した。

副詞に副ふ
副詞

第十七章 副詞の用法

副詞は動詞・形容詞に副ひてその意味を限定するを常とすれども、時としては他の副詞に副ひてその意味を限定することあり。例へば、

全級殆ど皆及第せり。

たいそうしづかに物語る。(口)

の殆どたいそうが、副詞皆しづかにを限定せるが如し。

副詞は又、語を隔てて動詞・形容詞の意味を限定することあり。例へば、

性頗る山水を好む。

少しも失望してゐる様子がな。

の頗るが山水をの二語を隔て、下なる動詞好むを限定

語を隔て、
動詞・形容
詞を限定す
る副詞

動詞・形容
詞・副詞の
用を爲す語
を限定する
副詞

し、少しもが、失望してゐる様子がの六語を隔て、下なる形容詞ないを限定せるが如し。

その外、副詞は動詞・形容詞又は副詞の用を爲す語に副ひて之を限定することあり。例へば、

決して人を欺くべからず。

たつた半日の道程です。

纔に一艇身の差にて敗れたり。

の決してが動詞の用を爲す語、欺くべからずを限定し、たつたが形容詞の用を爲す語、半日のを限定し、纔にが副詞の用を爲す語、一艇身の差にてを限定せるが如し。

練習

一 副詞が副詞を限定する場合を説明せよ。

二 副詞が若干の語を隔て、下なる動詞・形容詞を限定する場合

を示せ。

三次の文に於ける副詞を指摘し、且その限定せる語を示せ。

(イ) 日やがて暮れなんとするに、風益、涼しく、氣愈、清し。

(ロ) 東京に於ける商家の開業式は頗る盛なり。先づ新聞に廣告し、引札を配り、賑やかに店頭を飾りて、専ら顧客を招かんことを務む。

(ハ) われはしばらく此の地を去らんとして、かつてわが父より預かりたりし行李を更に伯父なる人に預けたり。

(ニ) 都會は年中いそがしく、さわがしく、街路は朝に晩に雜沓し、砂ほこり煙の如く立ち舞ふ。

(ホ) 曾て見し時には、小學讀本を高らかに讀み上げて誇りげに人に聞かせたる男の子の、今ははや陸海軍を談じ、外國の形勢を説く程になりたるもあり。

(ヘ) たま／＼一方を突き破つて山頂は達したかと思へば、忽ち

他の砲臺から十字火をあげせかけますので、とても保ちきれません。

(ト) 小生病中は度々御尋ね下され、誠に忝く存じ奉り候。近頃漸く全快いたし候間、何卒御安心下され度候。

次の一の處に副詞を挿入せよ。

(イ) 汝等——校則を守るべし。

(ロ) ——此の内に入るべからず。

(ハ) ——その志を達せざるに、年——老いたり。

(ニ) 明日——お目にかゝりたいことがございますから、——御在宅下さいませう、——お願ひ申します。

第十八章 接續詞の種類及び用法

接續詞はその意味の上より之を次の四つに分つ。

一、並列・累加の場合に用ふるもの

接續詞の種類
並列・累加

選擇

又 且 尙 及び 況や まして しかのみならず(略してのみならず)(以上、文、口) その上 さうして
そして それに それから(以上、口) など。

○又尙は副詞の接續詞に轉じたるものにして、及びは動詞の接續詞に轉じたるものなり。

二、選擇の場合に用ふるもの

又は 或は 若しくは 又は(以上、文、口) それとも
(口) など。

反意

三、反意を示す場合に用ふるもの

されども 然れども(以上、文) 但し 併し 尤も
處 しかしながら さりながら けれども それ
ですが(略してですが) それですのに(略して、それの

原因・理由

四、原因理由を表す場合に用ふるもの

然れば 然らば されば さらば かるが故に
故に 隨ひて 因りて 間(以上、文) それですから
(略して、ですから) それゆゑ それで(略して、で) そ
れでは(略して、では) それなら さうすると(略して、
すると) さうしたら(略して、したら) そこで(以上、口)
など。

○處は名詞の接續詞に轉じたるものなり。

○間は名詞の接續詞に轉じたるものなり。

練習

一 接續詞の種類を問ふ。

二次の文に於ける接續詞を指摘せよ。

(イ) 霞か、雲か、はた雪か。

(ロ) 此の山、月に宜しく、又雪に宜し。されど、一株の花木だになきを憾む。

(ハ) 本日出席仕るべき筈の處、昨夜より引きこもり居候間、缺席仕候條、惡しからず御思召下され度候。

(ニ) 本日西又は南の風晴。但し驟雨の兆あり。

(ホ) 明朝或は明晩はお尋ね申さうと思つてゐます。もつとも、雨天でしたら失禮いたすかも知れません。

三次の——の處に適當なる接續詞を挿入せよ。

(イ) 秋は來りぬ。——暑氣未だ退かず。

(ロ) 口は禍の門なり。——口は慎まざるべからず。

感動詞の種類

文の首につく感動詞

(ハ) 今日風は吹くであらう。——雨は降るまい。
(ニ) 彼は學力が優秀で、品行が方正です。——惜しいことに、身體が強健でありませぬ。

第十九章 感動詞の種類及び用法

感動詞には、あゝ、悲し。の如く、文の首に附くものと、
「悲しいかな」の如く、文の末に附くものとあり。今
左に此等の重なるものを列記せん。

一、文の首につくもの

あな……………あなかしこ。

いざ……………いざ行かん。

すは……………すは火事よ。

あら……………あらをかしや。

あはれ……………あはれ悲しきかも

いで……………いで御話承らん。

やよ……………やよ待て。(以上、文)

あれ……………あれごらんさい。

文の末につく感動詞

いゝえ……いゝえちがひます。	いえ……いえさうではない。
おや……おや大變だ。	さあ……さあ上り下さい。
さて……さて困つたものだ。	どれ……どれ出かけよう。
なに……なにかまふものか。	はい……はいさやうです。
まあ……まあ立派なこと。	やあ……やあ御機嫌よう。
	(以上口)

右の外、口語の感動詞に「いゝえ」「おい」「おゝ」「こら」「これ」「それ」

二、文の末につくもの

や……あゝかなしや。	よ……すは火事よ。
おは……吾妻はや。	も……あはれ悲しも。
な……わが身悲しな。	かも……嬉しきかも。
かな……美なるかな。	がな……なくもがな。

右の外、此の類に屬するもの尙少なからず。
練習

- 一 感動詞の種類を問ふ。
- 二 口語及び文語の感動詞の重なるものを挙げよ。
- 三 次の文に於ける感動詞を指摘せよ。
 - (イ) 松島や、あゝ松島や、松島や。
 - (ロ) おや、懷中時計が五分進んで居るぞ。
 - (ハ) あつばれ勇ましき武者振かな。
 - (ニ) まどかにめぐれよ、やよ子供。

助詞の種類

名詞・代名詞に添はる助詞

- (ホ) さて／＼こまつたことになつたわい。こりやまあどうし
たらよからう。
- (ヘ) あなおもしろの庭のけしきや。
- (ト) かんざしよ、櫛よ、さて世は暑いこと。
- (チ) あはれ、手の中の玉よとめでいつくしめる子を失ひし母の
心はよ。

第二十章 助詞の種類及び用法

助詞はその添はる語の種類によりて、これを左の三種に分つ。

一、名詞・代名詞に添はる助詞 次の例ののがをにへとよりまで等をいふ。

- 私の靴。 米のなる木。 梅が枝。 花を見る。
- 山に登る。 前へ進め。 月と花と。 友人と遊ぶ。

倫敦より歸る。 花より團子。 横濱まで見送る。

右の例中、前のは所有の關係を示し、後のは動作状態の主を示し、がは所有の關係を示し、をは動作の目的を示し、には場所を示し、へは方向を示し、前のは事物の並列を示し、後のは、と共にの意を示し、前のは起點を示し、後のよりは標準を示し、までは到着點を示す。口語にては起點を示すよりはからとなり、並列を示すとは最終の一を省くこと左の如し。

倫敦から歸る。 月と花。

二、種々の語に添はる助詞 次の例のはばもぞなむやかこそしだにすらさへのみばかりなな……そ等をいふ。

雪は白し。 身は慎む。

種々の語に添はる助詞

筆も墨もなし。

花をぞ観る。

月をこそ愛づれ。

必ずしも然らず。

ありやなしや。

あるかなさか。

立錐の地だになし。

禽獸すら恩を知る。

疾風さへ加はる。

粥をのみすゝる。

泣くな笑ふな。

泣きそな笑ひそ。

右の中はばは特に或事物をひき出していふに用ひ、もは事物を並列していふに用ひ、ぞなむこそしは特に上の語を指していふに用ひ、やかは疑ひ又は問ふ意に用ひ、だにすらは輕きを示して重きを言外に悟らしむる意に用ひ、さへはあるが上になほ物の添ひ加はる意に用ひ、のみば

かりはそれと限る意に用ひ、なな…そは禁止の意に用ひ、口語にては文語のやはかとなり、だにはでもとなり、すらはさへとなり、さへはまでとなり、な…そはなとなり、のみはばかりとなる。次の例を見よ。

あるかないか。

立錐の地でもなし。

禽獸でさへ恩を知つて居る。

疾風までが加はる。

粥ばかりすゝる。

泣くな笑ふな。

○はばもにが等は口語と文語と相同じ。

○ぞなむしは口語に相當する語なし。但しこそは稀に口語にも用ひらる。

○なむはなんと發音し、従つてなんとも記す。

三、動詞・形容詞・助動詞に添はる助詞 次の例のば・ど・ども・とも・にをがつゝながらで等をいふ。

動詞・形容詞・助動詞に添はる助詞

問はば答へん。

問へば答ふ。

問へども答へず。

問ふとも答へじ。

春來れるに花咲かず。

梅は咲けるを鶯は來鳴かず。

風は吹きしが雨は降らざりき。

本を讀みながら歩む。

雨降らで風吹く

右の例中、前のばは假定の條件、後のばは確定の條件にして、共に順當なる接續の意を示し、どどもは確定の條件、どもは假定の條件にして、共に不順當なる接續の意を示し、にをがは反對になる意を示し、つゝながらは動作の同時に起ることを示し、では打消の意を示す。
口語にては、文語の確定のばは、ので又はからとなり、假定

のともはてもとなり、をはにとなり、つゝはながらとなり、ではないで又はずにとなる。次の例を見よ。

問ふのでから答へる。

問うても答へまい。

梅は咲いてゐるのに鶯は來て鳴かぬ。

本を讀みながらあるく。

雨が降らないで風が吹く。

この他は、口語と文語と大率相同じ。

練習

- 一 助詞の種類を説明せよ。
- 二 助詞の中、口語と文語と異なるものを挙げよ。
- 三 次の文に含まるゝ助詞を示せ。
 - (イ) 君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりてこのむすまで。

(ロ) うめ咲くそのにかすみつゝ、みねのさくらの花ぐもり、くもりもはてぬおぼろ夜のつきこそはるのひかりなれ。

(ハ) 目の前に不用なりとて、妄に物を捨つべからず。諺に「禍も三年立てば用をなす」とさへいへり。

(ニ) 勅なればいとまかしこし、鶯の宿はと問はゞ、いかゞ答へん。

(ホ) 元來英國は自由貿易主義を執つて、他國よりも商業が早く開けた爲に、世界の富を集めて居るといふ形がある。晉に物貨の集まるばかりでなく、繪畫や古器物に至るまでも、世界の各國のものを英國で見ることが出来る。

(ヘ) 上には長くも民のためとて遠き境に出でましつるほどなれば、いかなる行宮にましゝて、此の風の音に御心をなやましたまふらん。皇太后の宮にはいかにおはしますにか。宮たちも驚きやしたまふらん。

(ト) みがかずば、玉も鏡も何かせんまなびの道もかくこそあり

けれ。

四次の〇〇の處に適當なる助詞を補へ。

- (イ) 寒中〇〇谷川〇鳴〇とゞめ、老人〇炬燵〇離れ難し。
- (ロ) 松〇千歳〇經〇〇、常磐〇色〇かへじ。
- (ハ) 庭〇雪〇犬〇足跡〇〇消えそめて、野〇山〇やがて元〇姿〇なる。
- (ニ) 勉強〇〇すれ〇どんな事〇〇出来る。
- (ホ) 孟子〇母〇孟子〇教育する爲〇、三たびその居〇遷したり。孟子〇他日大儒〇なりし〇、全く母〇教育〇よかりし〇よるなり。
- (ヘ) 上根〇器用〇すき〇三つ〇中すき〇〇物〇上手なりけれ。
- (ト) これ〇日本男兒〇最後〇肉彈なる。傲慢無禮〇此の仇、今〇〇思ひ知れ。〇打込む太刀筋〇、血〇流す伏屍〇數知れず。

第二十一章 品詞の轉成

品詞は其の形のまゝにて他の品詞に轉ずることあり。今左に之を略説せん。

一、轉來の名詞 光戰の如き動詞の連用段、白赤の如き形容詞の語幹、遠く近くの如き形容詞の連用段が名詞に轉ぜるものをいふ。次の例を見よ。

螢の光

戰の巷

白の毛布

赤の頭巾

遠くの親族

近くの友人

○動詞の名詞に轉ずるは、通例その連用段よりするものとす。

二、轉來の代名詞 僕、足下、私、君の如く、名詞の代名詞に轉ぜるものをいふ。左の例を見よ。

僕の考

足下の御説

轉來の代名詞

轉來の名詞

轉來の副詞

轉來の接續詞

私の下駄 君の靴
○御前御身、大兄、愚弟、わらは等も、亦名詞の代名詞に轉ぜるものなり。此の類なほ多し。

三、轉來の副詞 朝夕の如き名詞、つまりの如き動詞の連用段、早く遅くの如き形容詞の連用段等が副詞に轉ぜるものをいふ。次の例を見よ。

朝出で夕歸る。

つまり聯合軍の勝利だ。(口)

早く起き、遅く寝ぬ。

○形容詞の副詞に轉ずるは、常にその連用段よりするものとす。

四、轉來の接續詞 間處の如き名詞、及びの如き動詞の連用段、又の如き副詞等が接續詞に轉ぜるものをいふ。次の例を見よ。

本日缺席仕候間、御届申上候。一秋冷相催候處、御起居如何に候か。

智仁及び勇を三徳といふ。 山又山を越えて行く。

練習

一品詞の轉成とは何ぞ。

二轉來の名詞代名詞を説明せよ。

三轉來の副詞接續詞を説明せよ。

四次の文に於ける轉來語を指摘せよ。

(イ) ゆきは汽車かへりは汽船。

(ロ) 今日雨ふらず明日雨ふらざれば、作物枯れ果てん。

(ハ) 母の思は空に満ち、ゆくへも知らず、はてもなし。

(ニ) あまり大食すると、病を醸す恐がある。

(ホ) 祖先の祭をつゝしみ、子孫の教を忽にせず。

(ヘ) 年々歳々花相似たれども、歳々年々人同じからず。

(ト) 青白赤の三艇は、互にまけじ、劣らじと勇ましく進みたり。

(チ) 遠くなり近くなるみの濱、千鳥鳴く音に潮の満干をぞ知る。

第三篇 語 その二

第一章 語の構造 その一

語の構造

疊語

單純なる語の二個以上相集まりて更に一語を作ること
を語の構造といふ。語の構造には左の四種あり。
一、疊語 人々・我々・とくく・見すく・等の如く、同語の重
なりて一語となれるものをいふ。今左にその數例を示
さん。

一、疊語の名詞

木々 山々 色々

二、疊語の代名詞

われく だれく

三、疊語の形容詞

長々し さかしくし なれくし 花々し

四、疊語の副詞

月々 時々 それく 追ひく 恐るく
早々 久々 よくく 尙々 又々

熟語

五、疊語の感動詞 さびく あはれく(文) おやく まあく(口)

○名詞の疊語は、或は名詞として用ひられ、或は副詞として用ひらる。

○代名詞の疊語は、或は代名詞として用ひられ、或は副詞として用ひらる。

○動詞の連用段又は終止段の疊語、及び形容詞語幹の疊語は、副詞として用ひらる。

○形容詞の語幹を重ね、之にしの語尾を添へたるもの、及び副詞感動詞を重ねたるものは、何れもその語の意味を強む。

○動詞の連用段又は名詞を二つ重ねて、疊語の形容詞を作ることあり。疊語の形容詞は、すべて第二類の活用をなす。

二、熟語 春風・櫻狩・物語る・名高し・誠に・然らば等の如く、相異なる二個以上の單語の相合して一語を作れるものをいふ。左にその數例を示さん。

一、熟語の名詞

朝日 雨乞 夜寒 書取 織物 待遠 遠淺

淺瀬 長生

二、熟語の動詞

心ざす 成り立つ 近寄る

三、熟語の形容詞

奥ゆかし 有り難し 暑くるし

四、熟語の副詞

俄に 總べて とくに たゞに

五、熟語の接續詞

随つて なかんづく しかのみならず

○熟語の名詞を成す要素は、重に名詞動詞の連用段形容詞の語幹などなり。

○熟語の名詞には山櫻花・蚊遣火食はず嫌ひしたり顔などの如く、三語以上の結合より成るものあり。

○熟語の動詞は、名詞動詞の連用段又は形容詞の語幹に動詞を結合せるものなり。

○熟語の形容詞は、名詞動詞の連用段又は形容詞の語幹に形容詞を結合せるものなり。

連濁 轉音 約音 省音 加音

○熟語の副詞は、多くは名詞、動詞、形容詞又は副詞に助詞を結合せるものなり。

○熟語の副詞には、ほしいまゝにやゝもすればの如く、多くの語より成れるものあり。

○熟語の接續詞は、主として動詞と助詞との結合せるもの、又は多くの語の結合せるものなり。

數語相合して疊語又は熟語を作るときは、まゝ元の音を變ふるものあり。之を分ちて連濁・轉音・約音・省音・加音の五とす。

連濁とは、次の語の頭の音を濁るをいひ、轉音とは、上の語の末の音の轉ずるをいひ、約音とは、二音の約まりて一音となるをいひ、省音とは、或音の全く失するといひ、加音とは、或音の加はるをいふ。左の諸例を見よ。

一、連濁 いしはし(石橋)・いしばし。しかしか(然々)・しかん。

二、轉音 あめと(雨戸)・あまど。くちわ(口輪)・くつわ(轡)

三、約音 あのかた(彼方)・あなた。さしあぐ(差上ぐ)・さゝぐ(搦ぐ)

四、省音 すみすり(墨磨)・すいり(硯) ふみばこ(文箱)・ふばこ。

五、加音 やか(八日)・やうか。ひか(六日)・ひいか。

練習

一 疊語とは何ぞ。

二 熟語とは何ぞ。

三 熟語を作るときに於ける音の變化を例解せよ。

四 次の語の構造につきて知るところをいへ。

様々、足弱、作り話、嬉し涙、長びく、見にくし、素より、さぞ、主として、美々し、おちいる、くれぐれも。

五次の文に於ける疊語及び熟語を指摘せよ。

(イ) 時々刻々、バルチャツク艦隊見ゆとの無線電信を待つ。

(ロ) 東の障子明放ちたるところより見下せば、瑞々しき稻田の
彼方、暮れ行く濱邊の家々を隔て、白帆漸く消え、漁火次第
に鮮かなり。

(ハ) 新緑の頃の青々と晴れた空には、高い木立や茂つた竹林な
どが最もよく折合つて見える。

(ニ) 古の奈良の都の八重櫻、今日九重に匂ひぬるかな。

(ホ) うれし舟の旅、うかぶ鷗、たつ千鳥。あれ／＼波間に見よ見
よ岩間に、山々浦々、沖漕ぐ釣舟、おながらに見つゝ、ぞゆく。

(ヘ) 富士の中腹に群がる雲は、黄金色に染まつて、見るがうちに
様々の形に變ずる。連山の頂は、白銀の鎖の様な雲が次第
に北に走つて、終には暗憺たる雲のうちに没してしまふ。

(ト) 年七十に垂んとして、一歳の行萬哩を期し、節冬寒に向ひ、北
滿の野に見學す。忠君愛國の至情に出づるに非ずんば、孰
か能く此の如くならん。

接頭語

第二章 語の構造 その二

三、接頭語 「み雪」「た靡く」「か弱し」の「み」「た」「か」の如く、或語の
頭に冠し、之と結びつきて一語を作る、或獨立せざる語を
いふ。その重なるものは左の如し。

い	います。	いち	いちじるし。	いや	いやます。
う	うひ	え	えせ	お	お庭
う	うひ産	え	えせ歌	お	お庭
おん	おん心	か	か黒し。	き	き絲
け	け高し。	さ	さ迷ふ。	す	す足
た	た易し。	ひ	ひが	ほ	ほの見ゆ。
ま	ま心。	み	み吉野。	を	を田。

四、接尾語 友だち、高さ、春めく、男らしの、だち、さめく、らし
の如く、或語の下に結びつきて一語を作る、或獨立せざる

接尾語

語をいふ。その重なるものは左の如し。

ども我々ども
ら...かれら
がた...あなたがた
たち君たち
ばら奴ばら

右は體言の下につきて、複數または數の多きことを示せり。

さ長さ 嬉しさ み深み 樂しみ げ重げ 嬉しげ

右は形容詞の語幹につきて、名詞を作れり。

めく時めく(四か段行) なふ伴なふ(四は段行) む...樂しむ(四ま段行)
ばむ黄ばむ(四ま段行) がる悲しがる(四ら段行) まる高まる(四ら段行)
ぶ...古ぶ(上は二段行) さぶ神さぶ(上ら二段行)

右は名詞・形容詞の語幹等につきて、動詞を作れり。

けし...静けし(類第一) らし...馬鹿らし(類第三)

がまし...そこがまし(類第三) がてら...花見がてら

かた...報知かた... すがら...道すがら

づつ...少しづつ... ばかり...寝るばかり

まに...思ふまに...

○まに...は略してまに...ともいふ。

右は名詞・代名詞・形容詞・動詞等につきて、副詞を作れり。

練習

一 接頭語とは何ぞ。

二 接尾語とは何ぞ。

三次の文に於ける疊語・熟語・接頭語・接尾語を指摘せよ。

- (イ) 目に青葉、山ほととぎす、初鰯。
- (ロ) 足の痛みは異ならねど頭の重さはやゝ薄らぎたり。
- (ハ) 同じ自然の御母の御手に育ちし姉と妹、み空の花を、星とい

ひ、わが世の星を花といふ。
 (ニ) 燈火の光、晴れたる夜の星にまがひていと涼しげなるに、た
 なびく雲の絶間より夕日の影花やかに匂ひ出でたる、いと
 をかし。

(ホ) 友だち來れ、われらが友、とくく來れ、いざやこら。

(ヘ) 追々夜寒になるゆゑ、皆々薄著を戒むべし。

(ト) 氣候も大きに春めきたれば、近日二三の友だちと共に、彼を
 なはん。

(チ) 幸に風は追手、帆を張つていよく洞庭湖の中に乗り入
 らうとする。夕日はいつしか二つの小島の間、落ちて、見
 るく深紅の眞玉が湖の中に沈む。

第三章 動詞と助動詞との接續 その一

助動詞を動詞につゞくるには固より一定の法則あり。

動詞の將然
段に續く助
動詞

今左に之を略述せん。

一、動詞の將然段に續く助動詞

(い) むずさりじましむまほしは、すべての動詞の將然
 段に續く。左の表を見よ。

四……誘は
 ら變…有ら
 な變…死な
 か變…來
 さ變…爲
 上二…起き
 下二…捨て
 上一…見
 下一…蹴

ひ	花見に友人を誘はひ。
ず	友人と花を上野に見ひ。
ざ	老いず死なずの薬もがな。
ざり	彼は終に訪ひ來ざりき。
じ	不孝の振舞をばせじ。
まし	明日も恐らくは降雨有らじ。
しむ	明朝は五時に起きまし。
まほし	下女に塵を捨てしむ。
まほし	ボールを蹴まほし。

○あ行下二段の動詞得の將然段得にしむを添へて得しむといふべきを得せしむといふことは、中古文の法則にはあらねど、今一般に許容せらる。

○上一段活用動詞の將然段著似^レ見^ル射^ル居^ルにしむを添へて著しむ見しむなども誤なり。

(ろ) るすは、四段ら行變格な行變格の動詞の將然段に續き、らるさすは、その外の動詞の將然段につゞき、りは、さ行變格の動詞に限りてその將然段につゞく。左の表を見よ。

四……誘は	大いに満足せり。
ら變…居ら	花見に誘はる。
な變…死な	父上は宅に居らる。
	す……潔く死なす。

か變…來	先生、宅に來らる。
さ變…爲り	大いに満足せらる。
上二…起さ	馬丁、馬に蹴らる。
下二…捨て	毎朝五時に子供を起さす。
上一…見	下女に塵を捨てさす。
下一…蹴	子供に展覽會を見さす。

○さ行變格の動詞の將然段にらるさすを添へて出席せらる、掃除せさすなどいふべきを、出席さる、掃除さすなどいふことあり。中古文の法則にはあらねど、今は一般に許容せらる。

(は) 口語の助動詞うれるせるは四段活用の動詞の將然段に續き、ようられるさせるまいは四段以外の動詞の將然段に續き、ぬないは總ての動詞の將然段に續く。左の表を見よ。

四	誘は	有ら	死な
か	變	爲	來
上	起	見	捨
下	一	見	捨

花見に誘はれる。
 明日は晴天で有らう。
 潔く死なせる。
 今日來よう。
 馬に蹴られる。
 下女に塵を捨てさせる。
 目に非禮の色を見まい。
 六時が鳴つてもまだ起き。
 悪戯をせぬ。
 悪戯をしなす。

○ぬないが、さ行變格の將然段に續くときには左の如くなる。

○ようまいは、さ行變格の將然段にはしにつきて、左の如くなる。

○られるさせるは、さ行變格の將然段につきて、約まりて左の如くなる。

くなる。
せられる。せさせる。

練習

一 動詞の將然段につきて助動詞は何々か。

二 するすすしむと動詞との續き方を述べよ。

三 さ行變格の動詞と口語のぬないようまいられるさせるとの續き方を問ふ。

四 次の文の○○の處に適當なる助動詞を挿入せよ。

(イ) 下男に命じて門を閉ぢ○○。

(ロ) 今日風が烈しいから、海が荒れ○○。(口)

(ハ) 余の演説は來賓一同に傾聴せ○○たり。

(ニ) 早く目的の地に著か○○。

(ホ) 知ら○○を知ら○とせよ。

五次の文の中に中古文の法則に合せぬところ、又は誤れるところ

- ろあらば之を示せ。
- (イ) 朋友に尊敬さるゝ人こそ羨ましけれ。
- (ロ) 彼をして志を達するを得せしむ。
- (ハ) 書生に門前の掃除をさす。
- (ニ) 義経、那須與市をして扇眼を射せしむ。

第四章 動詞と助動詞との接続 その二

動詞の連用
段に續く助
動詞

二、動詞の連用段に續く助動詞

(イ) けりつたり (了) けむたしは總ての動詞の連用段に續き、
 (ぬ) (了) はな行變格以外の動詞の連用段につゞく。左の
 表を見よ。

な變…死に
 四…咲き
 ら變…有り

花咲きぬ
 塵を捨てぬ
 戦ひて死にき

か變…來
 さ變…爲
 上二…起き
 下二…捨て
 上…見
 下…蹴

けり 花咲きけり
 つ… 友人遊びに來つ
 たり… 公園に散歩したり
 けむ… いづこに捨てけむ
 たし… 博覽會を見たし
 ボールを蹴たし

(ろ) きは動詞の連用段に續くが常なれど、か行さ行の兩變格に續く時には例外あり。左の表を見よ。

か變…來	將然…こ	連用…き	し	か	ど	行	か	ざ	り	き
さ變…爲	將然…せ	連用…し	し	か	ど	行	か	ざ	り	き

◎さ行四段にては、爲しし事、盡しし人と連用段につゞくるを中古文の法則とす。されども、今は爲せし事、盡せし人の如くいひて、さ行變格と混用せり。

◎さ行變格にては、せし事、感ぜし話などの如く、將然段よりしを受くべし。しし事、感じし話などの如く、連用段に續くべからず。

(は) 口語のた_(完過了去)・ます_(たい)はすべての動詞の連用段に續く。左の表を見よ。

上	四	四	四	四	四
見	起	爲	來	有	咲
見	起	爲	來	有	咲
た	た	た	た	た	た
相撲が見たい	勉強をしたい	ボールを蹴ります	五時に起きます	机があります	友人が死んだ
た	た	た	た	た	た
た	た	た	た	た	た
た	た	た	た	た	た

塵を捨てたい

下
捨て
蹴

練習

- 一 動詞の連用段に續く助動詞は何々ぞ。
- 二 完了のぬと動詞の連用段との續き方を説明せよ。
- 三 きとか行さ行の兩變格活用の動詞との續き方を問ふ。
- 四 次の文の○○の處に適當なる動詞の語尾を挿入せよ。
 - (イ) 書物を學校に置き忘○ぬ。
 - (ロ) 昨朝神戸を出發○き。
 - (ハ) いたづらに過○し月日こそ惜しけれ。
 - (ニ) これ我が最も愉快に感○し一事なり。
 - (ホ) みづから爲○しことに責任を免るな。
- 五 次の句の中に中古文の法則に合せざるところ、又は誤れるところあらば之を改めよ。

費せし金。講じし本。著ならせし衣。言ひ出せし折。語りつくし時。

第五章 動詞と助動詞との接続 その三

三、動詞の終止段に続く助動詞

(い) まじらむらしべしべかりめりなり(歌)は、ら行變格以外の動詞の終止段に続く。左の表を見よ。

四……咲く	まじ…… 今日は訪ひ來まじ。 廢物たりとも捨つまじ。
な變……死ぬ	らひ……花や咲くらひ。
か變……來	らし……馬人を蹴るらし。
さ變……爲	べし……朝は早く起くべし。
上二……起く	べかり……死ぬべかりし命をながらふ。
下二……捨つ	めり……彼は此方を見るめり。

動詞の終止段に続く助動詞

(ろ) 口語のまじは四段活用の動詞の終止段に続き、らしいは總ての動詞の終止段に続く。左の表を見よ。

上二……見る	なり…… 秋の野に人まつ蟲の聲なり。 (歌)
下二……蹴る	らしい…… あ、の、荒、馬、は、よ、く、馬、丁、を、蹴、る、ら、し、い。
四……死ぬ	花は咲くまじ。 まだ死ぬまじ。 そんな事は有るまじ。
か變……來	もう死ぬらし。 尋ねて來るらし。
さ變……爲	上京するらし。 早く起るらし。
上二……起る	景色を見るらし。 廢物などは惜まらず捨てるらし。
下二……捨てる	あ、の、荒、馬、は、よ、く、馬、丁、を、蹴、る、ら、し、い。

○まいが、四段活用以外の動詞の將然段に續くことは已に前にいへり。
練習

一 動詞の終止段に續く助動詞は何々か。

二 口語のまい及びらしいは動詞の何段に續くか。

三 次の文に於ける助動詞の接続の誤を正せ。

(イ) 此の品に手を觸るべからず。

(ロ) 此の處に塵芥を捨てべからず。

(ハ) 彼は毎夜深更まで勉強するらし。

(ニ) 不都合の事なきやうこゝろえべし。

(ホ) 去りたきものは去るべく、來たきものは來るべし。

(ヘ) 今日雨も降るまい。風も吹かまい。

(ト) 富士山嶺の雪は夏も絶えまい。

第六章 動詞と助動詞との接続 その四

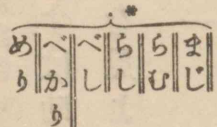
動詞の連體
段に續く助
動詞

四、動詞の連體段に續く助動詞

(い) なり(定指)ごとしは總ての動詞の連體段に續き、まじらむ

らしべしべかりめりは、ら行變格の動詞に限りてその
連體段に續く。左の表を見よ。

- 四……咲く
- な變……死ぬ
- ら變……有る
- か變……來る
- さ變……爲る
- 上二……起くる
- 下二……捨つる
- 上一……見る
- 下一……蹴る



なり

ごとし

さることは有るまじ。
 燒死せるものも有るらし。
 落第せし生徒も有るべし。
 深山の奥の花も咲くなり。
 運動も勉強もするなり。
 朝は五時に起くるなり。
 魚の水有るごとし。
 敵履を捨つるごとし。
 その様目に見るごとし。

○ごとしはのを媒として名詞代名詞に続きがを媒として動詞形容詞の連體段に續く。左の例を見よ。

月光鏡のごとし。

落花蝶の舞ふのごとし。

環の端なきのごとし。

良買は深く藏して虚しきのごとし。

○詠歌のなりは動詞の終止段に續き指定のなりはその連體段に續く。

(ろ) 口語のだですは助詞のを媒として動詞の連體段に續く。左の表を見よ。

上	一	起る	見る
二	變	爲る	
三	來	來る	
四	有	有る	
	死	死ぬ	
	咲	咲く	

(の)だ

言ひにくい事情が有るののだ。
正直だから店が繁昌するののだ。
忙しいから朝早く起るののだ。

(の)です

言ひにくい事情が有るののだ。
正直だから店が繁昌するののだ。
忙しいから朝早く起るののだ。

動詞の已然
段に續く助
動詞

五、動詞の已然段に續く助動詞

りは四段活用の動詞に限りてその已然段に續く。左の例を見よ。

下
捨てる
蹴る

○だらうでせうなどにつゞくときは、のを省くことあり。

花美しく咲けり。

家大いに富めり。

○りがさ行變格の動詞の將然段に續くことは已に前にいへり。

○りをな行變格死ぬの命令段死ぬに續けて死ねりとする事、及びら行變格居り異なるの已然段居れ異なるに續けて居れり異なる事、
することは、中古文の法則にはあらねど、今は一般に許容せらる。但し往ねり侍れり流れりなどいふは、固より誤なり。

練習

- 一 動詞の連體段に續く助動詞は何々ぞ。
- 二 口語の助動詞だ。では動詞の何段に續くか。
- 三 詠歎のなり及び指定のなりは動詞の何段に續くか。
- 四 是は動詞の何段に續くか。
- 五 次の文に於ける助動詞の接續法を説明せよ。
 - (イ) 男のすなる日記といふものを女もして見んとてするなり。
 - (ロ) 同じ路を引きかへすのは愚である。迷つた處で、今の武藏野に過ぎない。まさかに行き暮れて困ることはあるまい。
 - (ハ) 朝な／＼飯食ふごとに忘れじな、恵まぬ民に恵まるゝ身を。
 - (ニ) かゝる小さき舟にて廣き海を渡らんこと、父母あるものゝ爲すべき事かと怪しみ迷ひけるが、旅人は皆是にて渡る習なりといふに、聊か心強くなりて、遂に乗り込みたり。
 - (ホ) 亂れ飛んでは、このごろの曇り勝の空に何の星かと疑はれ、叢に集まつては、時ならぬに何の花かと怪しまれる。

第七章 助動詞相互の接續

これまででは、主として一助動詞の動詞に續く場合に就きて述べ來りしが、實際におのが思想を表はさんには、單一助動詞の添はれるのみにては尙其の意味を盡す能はざること多し。かゝる場合には、數助動詞を相接續せしめてその義を明かならしむるものとす。例へば、

風吹きぬべしとさわげは、舟に乗りなんとす。

燈火の發明されなかつた太古の世には、螢は随分廣く燈火の代用をつとめたものではありますまいか。

のぬべし。なん。されなかつた。ますまいの如し。

すべて助動詞は、たとひ數語相連續すとも、各自その固有の意義を失はざるものなれば、先づその一つづの意義

助動詞との接
續に關する
一般法則

を明かにし、さて後に全體の意義を考へ定むべし。例へば前例の「吹きぬべし」は、動詞「吹き」に完了助動詞「ぬ」と推量助動詞「べし」とを接續せるもの、「乗りなん」は動詞「乗り」に完了の助動詞「ん」と未來の助動詞「ん」とを接續せるものなることを知り、「發明されなかつた」は、動詞「發明せ」に可能の助動詞「られ」と否定の助動詞「なかつ」と過去の助動詞「た」とを接續せるもの、「ありますまい」は動詞「あり」に尊敬の助動詞「ます」と推量の助動詞「まい」とを接續せるものなるを知り、さて後に全文の意義を明かに考へ定むべきが如し。助動詞と助動詞とを接續する方法は、概ね動詞と助動詞を接續する方法に同じ。例へば前例の「吹きぬべし」のべしは動詞の終止段に續く助動詞なれば、又助動詞「ぬ(完了)」

の終止段ぬに續き、「乗りなん」のんは動詞の將然段に續く助動詞なれば、又助動詞「ぬ(完了)」の將然段に續けるが如し。他は之によりて類推すべし。

助動詞は相互の連續によりて種々の意義を生ずるものなれども、此等は前に述べし如く、其の一語々の意義だに明かにせば、實際の上に誤解を生ずること稀なるが故に、茲には之が説明を略し、單に時の助動詞を重ね用ふる場合に生ずる特殊の意義につきて次に説明すべし。

一、完了の助動詞と過去の助動詞との重用　こは完了の助動詞「ぬたりり」の連用段「たりり」に過去の助動詞「けり」又は「き」を加へたるものにて、過去の或時に於て動作の已に完了せる意を示す。之を過去完了といふ。次の

過去完了

例を見よ。

花咲き^〇に^{||}て^{||}
 花咲け^〇り^{||}たり^{||}
 け^{||}き^{||}
 け^{||}り^{||}

二、完了の助動詞と未來の助動詞との重用 完了の助動詞つぬ^{||}たり^{||}の將然段てな^{||}たら^{||}に未來の助動詞むを加へたるものにて、動作が未來の或時に於て完了する意を示す。之を未來完了といふ。次の例を見よ。

花咲き^〇な^{||}て^{||}
 たら^{||}
 む^{||}

◎てむは完了の希望を示す意となる。例へば、疾く往きてむ^{||}といへば、

未來完了

過去完了の推量

「疾く往つてしまひたい」の意となるが如し。
 ◎以上述ぶるところによりて、時のあらはし方には現在過去未來の外、更に現在完了過去完了未來完了の三様あることを知るべし。
 此の外、完了の助動詞つぬ^{||}たり^{||}の連用段てに^{||}たり^{||}に過去推量の助動詞けむ^{||}を連ねたるものあり。こは過去の時に於て動作の已に完了せる意を推量していふなり。次の例を見よ。

花咲き^〇に^{||}て^{||}
 たり^{||}
 け^{||}む^{||}

練習

一 助動詞と助動詞との接續に關する一般法則を問ふ。
 二 時の助動詞の重用を説明せよ。

三 各種の時のあらはし方を例によりて説明せよ。

四 次の文に於ける動詞助動詞の接續を説明せよ。

- (イ) 若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。
- (ロ) 此の兒文才あり、いかにも師を選びて學ばしめらるべし。
- (ハ) 臥牀に入りやせまし、入らずやあらましなど打案じつゝ、誓を讀む。
- (ニ) ちしなべてみのりよしと聞きつる千町田の稻も、吹きそこなはれつらんやなど思ひわづらひたまふ。
- (ホ) 信頼卿の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見えたまひしが、君の御事をかなしみて、うち萎れてぞ出でたまひける。
- (ヘ) 二十一年十月に至りて、内外の飾までも悉くとのほりて、天つ日嗣の常宮を定めたまはんに足らはぬことなくなりしかば、そがいたづきを空しうなさじとて、速かにうつろ

假定のば
確定のば

- はせ給はんことをおもほし立たせたまへるなるべし。
- (ト) 世に處するには、どんな難事に出會つても臆してはいかぬ。何でも大膽にかゝらなければならぬ。どうしようか、かうしようかと躊躇するやうになつては、もういかぬ。むづかしからうが、たやすからうが、断然遂行するに限る。
- (チ) 世の人は上野淺草園子坂とうかるめり。我も出でなんや、出でなん。病の募らば募れ。待たばとて、出でらるゝ日の來るにもあらばこそ。

第八章 用言と助詞との接續

助詞の中にも、亦動詞形容詞助動詞に添ふに一定の法則あるものあり。今左にその重なるものを略述せん。

一、假定のばと確定のば 假定のばは動詞形容詞助動詞の將然段に添ひ、確定のばは、その已然段に添ふ。左の例

を見よ。

風吹かば波立たむ。

風吹けば波立つ。

天氣よくば散歩せむ。

天氣よければ散歩す。

知らずば往きて問へ。

知らざれば往きて問ふ。

○ 假定の條件に應ずる説明語は假定なるを常とすれども、まゝ確定の説明語を用ふることもあり。左の例を見よ。

十日が日曜日ならば、十五日は金曜日なり。

○ 確定の條件に應ずる説明語は常に確定假定の何れをも用ふ。

○ 命令の語は、假定の説明語と見做す。

口語にては、動詞・形容詞・助動詞の第五段何れも假定の意となるが故に、次の如くいふ。前例の文語と對照して考ふべし。

假定の場合

確定の場合

風が吹けば波が立たう。

風が吹くので波が立つ。

天氣がよければ散歩しよう。

天氣がよいから散歩する。

知らなければ往つて問へ。

知らないから往つて問ふ。

○ 確定の場合にのて又はからを用ふることにつきては、第二編第二十章を参照すべし。

假定のととも
確定のどども

二、假定のとともと確定のどども 假定のとともは動詞及び動詞の如く活用する助動詞の終止段、並に形容詞及び形容詞の如く活用する助動詞の將然段に添ひ、確定のどどもは動詞・形容詞・助動詞の已然段に添ふ。左の例を見よ。

繪にかくと筆も及ばじ。

繪にかけど筆も及ばず。

乞ふとも與へじ。

乞へど與へず。

笑はるとも忍ばむ。

笑はるれども忍ぶ。

悲しくとも泣くな。

悲しいけれども泣かず。

見たくとも見るまじ。

見たけれども見じ。

○ともを動詞助動詞の連體段に添へて、笑はるとも怒らし、悔ゆるとも詮なからむの如くいふことあり。中古文の法則にはあらねど、今は一般に許容せらる。

○ともを形容詞の終止段に添へて、高しとも、樂しともなどいふは、正しからず。

○ともどももの二語の代りに、もを連體段に連ねて、如何なる理由あるも(ありとも)返付せず、春は來たるも、來たれども、花は未だ咲かずの如くいふことあり。此等は一般に許容せらる。されど、問題は易きも、合格者は多からざるべし、の文の如く、易きもが、易けれども易くとも

兩義に解せらるゝが如き場合には、之を用ひざるを可とす。
どどもが文語口語相同じく、どともが口語にてはてもとなることは、既に前篇に之をいへるを以て、茲にはその用例を示すに止めん。

てもの例(假定)

どどもの例(確定)

乞うても與へまい。

乞ふけれども、與へない。

笑はれても忍ばう。

笑はれるけれども、こらへる。

悲しくても泣くな。

悲しいけれども、泣かぬ。

見たくとも見まい。

見たいけれども、見まい。

練習

一 ばと動詞形容詞助動詞との續き方を問ふ。

二 將然段をうくるばと已然段を受くるばとは、如何なる相違あるか。

三 ともどもどもは動詞形容詞助動詞の何段に續くか。

四 ともどもどもとの意義を區別し、且、文の結び方を説明せよ。

五次の文に中古文の法則に合せぬところ、又は誤れるところあらば、之を改めよ。

(イ) 勉強せば、賢き人となる。

(ロ) 松は千歳を経るとも、常磐の色をかへじ。

(ハ) 都合あしとも、約束をば違へず。

(ニ) 都合あしけれども、約束をば違へじ。

(ホ) 鶉鴒はよくいふも、鳥たるを免れず。

(ヘ) たとひ討死するとも、その場をな退きそ。

(ト) 御寸暇もこれ有り候へば、御來車下され度候。

(チ) 無事暮し居り候は、御安心下さるべく候。

六次の○○の處に助詞を挿入せよ。又、各の文を口語に改めよ。

(イ) 善を爲○ば、人に敬はれん。

(ロ) 人は怒るとも、我は怒○る○。

(ハ) 父母に鞭うたるれ○、我は恨みず。

(ニ) 道遠ければ、車にて行○。

(ホ) みめ形いかに美しく○○、心ざま正しから○ば、善き人とは言はれ○。

第九章 用言と助詞との接續 その二

禁止のな

三、禁止のな などは、ら行變格の動詞の連體段、その他の動詞の終止段、及び受身使役等の助動詞の終止段に添ふ。左の例を見よ。

ら變：有る

な

決して御心配有るな

四……泣く
 な變……死ぬ
 か變……來
 さ變……爲

上二……起く
 下二……捨つ
 上二……見る
 下二……蹴る

受身……奪はる
 蹴らる

使役……奪はしむ
 見さす

○こゝに塵をすつるなよそみをするななけれなどのななけれは、なくあれの約まりたるにて禁止のなとはその品詞を異にせり。混すべからず。○なは口語も文語と同じ。而してそれく口語動詞又は口語助動詞の終止段に添ふ。

四禁止のな
 そな
 そはその中間に動詞の連用段を挿むを常とす。但しか行さ行兩變格の動詞に限りてその將然段を挿む。これも一種の助詞と見做すべし。左の表を見よ。

泣き
 有り
 死に
 起き
 捨て
 見
 蹴

か變
 爲

な
 來
 爲

泣き
 有り
 死に
 起き
 捨て
 見
 蹴

か變
 爲

な
 來
 爲

めしさうに泣くな
 徒に死ぬな
 こゝに來な
 すまじきことを爲な
 病をあして起くな
 こゝに塵を捨つな
 非禮のものを見るな
 みだりに人を蹴るな
 心を外欲に奪はるな(受身)
 馬に蹴らるな(受身)
 外欲に我が心を奪はるな(使役)
 ゆめく他人に見さすな(使役)

泣き
 有り
 死に
 起き
 捨て
 見
 蹴

か變
 爲

な
 來
 爲

泣き
 有り
 死に
 起き
 捨て
 見
 蹴

か變
 爲

な
 來
 爲

○な...その間に助動詞の添はりたる動詞を挿むときにも亦前の法則を適用するものとす。次の例を見よ。

な泣か^しめ^そ。

な行か^せた^まひ^そ。

な來^させ^そ。

五、をがに^つながら^てのみばかり^まて をがには動詞助動詞の連用段に添ひ、つながらは動詞助動詞の連用段に添ひ、ではその將然段に添ひ、のみばかりまでは名詞代名詞副詞のみならず又動詞助動詞の連用段にも添ふ。此等の語の意義及びその口語は已に第二篇に於て述べたれば、今はたゞ用例を次に示すに止めん。

を...
口文 雨の降るのを傘さして出て行きぬ。
口文 雨の降るのに傘をささないで出ていった。

をがに^つながら^てのみばかり^まて

が	に	つ	ながら	で	のみ
口文	口文	口文	口文	口文	口文
雪は降れるが割合に暖かなりき。	雪は降つたが割合に暖かだつた。	天の寒さに一著の綿衣だになし。	天の寒いのに一著の綿入さへもない	四方の景色を眺めながらあるく。	四方の景色を眺めながら歩む。
				攻撃せしめながら前進す。	攻撃させながら前進する。
				何事もなすで日を過す。	何事もなさないで日を過す。
				馬に蹴られて仕合なりき。	馬に蹴られなくて仕合であつた。
				たゞ一椀の粥をすいるのみなり。	たゞ一椀の粥をすいるばかりです。

ばかり 文 行かんといひしばかりなり。

まで 文 いかうといつたばかりだ。
口 文 それほどまでに心を勞するには及ばまい。

○つゝは時として動作の反復繼續を表はすに用ひらる。左の例を見よ。

心に慕ひつゝも、相見る機會を得ざりき。
日毎に叱られつゝ、憂き年月を過しけり。

練習

- 一 なな…その用ひ方を問ふ。
- 二 にをがの用法及び用言への續き方を問ふ。
- 三 つゝながらのみばかりまでの用法及び用言への續き方を示せ。
- 四 次の文に於ける用言と助詞との接続を説明せよ。

並列のと
指定のと

(イ) 吹く風をなこそその關と思へども、道もせに散る山櫻かな。
(ロ) 泰時運盡きたらば、鐵の築地を築くとも、助かり候はじ。運ありて君に仕ふべくば、これにて事足り候ふべし。

五次の文に於ける誤を正せ。

- (イ) 今日来るな明日来よ
- (ロ) 此の溝の中に塵をすてな。(口)
- (ハ) 友が訪ふとも、長居するな。
- (ニ) 友が訪ふとも、な長居せ給ひそ。
- (ホ) 悪しき事は決してするな。
- (ヘ) わさみな爲せそ、妄言なしそ。

第十章 用言と助詞との接続 その三

六、並列のと指定のと 並列のと指定のとは、共に本來名詞に添ふ助詞なれども、動詞・助動詞・形容詞にも添

ふことあり。かゝる場合には、並列のとはその連體段に添ひ、指定のとは終止段と連體段と已然段と命令段とを問はず、すべて切る、語の下に添ふ。これ前者は連體段の下にあるべき名詞を略せるものにして、後者はとより上の句を一體言と見做せるなり。左の例を見よ。

一、並列のと

知る(人)と知らざる(人)とを問はず、皆彼の死を悼む。

彼は學の博き(コト)と徳の高き(コト)とを以て衆に推さる。

二、指定のと

終止段に 善に善報ありと古人もいへり。
添はる例 花咲きぬと告げ越す。

物言へば唇寒しと芭蕉翁もいへり。

連體段に 人やあると問ふ。
花なむ咲きぬると告げ越す。

添はる例 春や疾き花や遅きと聞き分かん。

已然段に 家こそ榮ゆれとことほぐ。

添はる例 花こそ咲きつれと告げ越す。

祝ふ今日こそ樂しけれと生徒唱ふ。

命令段に 急がば立はれといふ諺あり。

添はる例 ゆめ人を侮るなと戒めたまふ。

非禮は見るなかれと古聖もいへり。

か 疑問のや

七、疑問のや、か やは動詞・助動詞・形容詞の終止段に添ひ、

かはその連體段に添ふ。左の例を見よ。

有りや無しや ありきやなかりきや

有るか無きか 有りしか無かりしか

○中古文の法則は前述の如くなれど、今は有るや、無きや、有りしや、無かりしやの如く、やを連體段に添へても用ふるに至れり。

や、かは又時として動詞・助動詞・形容詞の上に置かるゝこ

とあり。かゝる場合には、何れも下を動詞・助動詞・形容詞の連體段にて結ぶものとす。次の例を見よ。

人^やある。 花^や咲^きつる。 春^や疾^き、花^や遅^き。

誰^かある。 何^をか厭^ふべ^き。 桃^と櫻^と何^れか美^しき。

○^やか^は共に疑の意に用ひらるれど、誰^いづ^れの如^き疑の語を上^に添^ふるときは、文の結に^やを用^ひずして^かを用^ふるを中古文の法則とす。左の例を見よ。

汝^は何^事を思^ふか。 今日^は幾^日なる^か。

春^と秋^とい^づれ^がよ^きか。

但し現今は、何^事を思^ふや、幾^日なりや、い^づれ^がよ^きやの如^く、かゝる場合にも亦^やを用^ふるものあるに至^れり。

口語にては疑問を示すにか^を用^ひて^やを用^ひず、且必ず之を文の終に添^ふ。次の例を見よ。

か^反語^のや[。]

人^がある^か。 花^が咲^{いた}か。 春^が早^いか、花^が遅^いか。
や^かは又疑問の意より轉じて反語となることあり。左の例を見よ。

豈^悲ひに足^{らん}や。

誰^をか恨^みん。

か^反語^のや^は。

○^やか^に感動詞の^はを加^へたる^やは、か^はも亦反語となる。左の例を見よ。

我^やは手^だに^よれた^る。 いかで悲^み歎^くべ^きか^は。

練習

一 並列のと及び指定のとは動詞・助動詞・形容詞の如何なる段に續^くか。

二次の文のとの用法及び接続を説明せよ。

(1) 取ると取らざるとは汝にまかす。

(ロ) 古語に曰く、妖は徳に勝たずと、
(ハ) 寝よとの鐘の音枕にひびく。

三やかの用法及び助詞助動詞への續き方を問ふ。

四反語のやか及びやはかはにつきて知るところをいへ。

五次の文に中古文の法則に違へるところ、又は誤れるところあらば之を指摘せよ。

(イ) 君は此の間に答へ得るや、得ずや。

(ロ) 汝は如何に感ぜしや。

(ハ) 果して然るや否やを知らず。

(ニ) 嗚呼また何をやいはん。

(ホ) 此の事は如何に處理して可なるべきや。

十一章 品詞の識別

同形異義の助動詞たる指定のなりと詠歎のなり、指定の

なの識別

たりと完了のたり、過去のけりと詠歎のけり、打消のぬねと完了のぬねの區別、及び此等と他品詞との續き方につきては、已に前各章に於て之を詳説せり。此等の助動詞の外にも、尙その形を同じくして其の義を異にせる助動詞、助詞、感動詞等あり。今次に之を略説せん。

一、**なの識別** なのは(一)完了助動詞ぬの將然段なるなど、(二)禁止のなと、(三)感動詞のなとあり。(一)は動詞助動詞の連用段より受け、(二)は動詞助動詞の終止段より受け、(三)は動詞助動詞形容詞の終止段より受く。次の例を見よ。

一 花咲きなば見に行かじ

二 あるじなして春を忘るな

三 花の色はうつりにけりな

なむの識別

二、なむの識別 なむには(一)未來完了のなむと、(二)助詞のなむと、(三)感動詞のなむとあり。(一)は完了の助動詞ぬの將然段なに未來のむを加へたるものにて、動詞の連用段より受く。(二)は用言の連體段體言助詞等より受け、下を動詞・形容詞助動詞の連體段にて結ぶ。(三)は動詞助動詞の將然段より受け、希望の意を示す。次の例を見よ。

一花の散りなむ後ぞてひしかるべき。

二花の散るなむ惜しき。

三草葉の上はよきて吹かなむ。

にの識別

三、にの識別 には(一)完了助動詞ぬの連用段なるにと、(二)位置を示す助詞のにと、(三)反對の意を示す助詞のにとあり。(一)は動詞助動詞の連用段より受け、(二)は體言又は

用言の連體段より受け、(三)は用言の連體段より受く。次の例を見よ。

一目には見えねど、春は來にけり。

二去年今夜清涼に侍りき。

三夜の明けたるに、何とて起き出でざる。

◎右の外、降りに降る、急ぎに急ぎの如く、同一動詞の間に挟まり、連用段につゞきて、その意味を強むるに用ひらるゝ助詞のにもあり。

しの識別

四、しの識別 しには(一)過去の助動詞きの連體段なるしと、助詞のしとあり。(一)はか行變格の將然連用の二段、さ行變格の將然段、その他の活用 of 連用段より受け、(二)は種の語より受く。次の例を見よ。

一聞きしにまさりて、貴くこそおはしけれ。

二必ずしも然らず。

三頃しも、秋の最中なりき。

つゝの識別

五つゝの識別 之に(一)完了助動詞つゝの終止段なるつと(二)助詞のつとあり。(一)は動詞の連用段より受け(二)は或一定の名詞より受く。次の例を見よ。

一庭の眞砂も數へつべし。

二天つ日嗣 遠つ國 沖つ島。

ばやの識別

六、ばやの識別 之に(一)確定の助詞ばに疑問の助詞やを添へたるばやと(二)假定の助詞ばに疑問の助詞やを添へたるばやと(三)感動詞のばやとあり。(一)は動詞助動詞の已然段より受け(二)(三)は共にその將然段より受く。次の例を見よ。

一紅葉すればや照りまさららむ。

二心あてに折らばや折らむ。

三時鳥まだしきほどの聲を聞かばや。

七、はがをもやかの識別 之に(一)助詞のと(二)感動詞のとあり。今次に之を例示せん。

(い)はの識別

一善は急げ こそ何事ぞ。

二吾妻はや 何かは悲しからざらむ。

(ろ)がの識別

我が國 梅が枝。

一葦が散る難波の國。

字は書きしが晝はかゝざりき。

二そのことも知らぬ旅寝してしが。

○感動詞のがはがなと同じく希望の意を示す。

(は)をの識別

一(學)を修め、業を習ふ。

二(山)に登り、川を渡る。

をの識別

がの識別

はの識別

もの識別

(は)もの識別

花の盛にあはましものを。

八重垣つくる、その八重垣を、
音をのみぞ鳴く。

味もなく、香もなし。

字は書きたるも、晝はかゝざりき。

あはれかなしも、
待たずしもあらず。

やの識別

(ほ)やの識別

一 わが思ふ人はありや、なしや

二 あなちもしろの春雨や

かの識別

(へ)かの識別

一 雲か、山か、呉か、越か、
人誰か、生を欲せざらむ。

二 白露を玉にもぬける春の柳か。

○ 感動詞のかはかなの意なり。

練習

一 同形異義の助動詞を列記せよ。

二 助動詞と同形を有する助動詞を示せ。

三 助詞と同形を有する感動詞を示せ。

四 次の文の雙柱を施せる語の品詞を區別せよ。

(イ) 祈らずとも神や守らむ。
今を春べと咲くやこの花。

(ロ) 雨降らなむ。
雨降りなむ。
雨なむ降る。

(ハ) 忘れじな。
我を忘るな。
忘れなば問へ。
な忘れそ。

(ニ) いはぬが花
花も咲きぬ。

(ホ) 生きとし生けるもの。
生き残りしもの。

(ハ) 木枯吹きに吹く。
山に嘉木あり、海に珍魚あり。
春過ぎて夏來にけらし。

(ニ) 白露の色は一つを如何にして
木々の木の葉を千々に染ひらむ。

(ト) 秋の田の刈穂のいほの苦をあらみ、
我が衣手は露にぬれつゝ、

(チ) これやこの行くもかへるもわかれては、
知るも知らぬも逢坂の關、

ものをいふもくともり聲にひびきて聞えず、
色よりも香こそあはれと思ほゆれ、
たが袖ふれし宿の梅ども。

第四篇 文

第一章 文の成分

文の成分

文を組み立つる各の語即ち文の成分は、之を其の職分の上より見るときは、おのづから數種に分る。今左に之を説かん。

主語
説明語

一、主語 説明語 主語とは、文の題目となる語、即ち説明せらるゝ語をいひ、説明語とは、主語なる事物を説明する語をいふ。例へば、

「汽車來る。」 「浪高し。」

主語の構造

の文に於て、汽車、浪は主語、來る、高しは説明語なるが如し。主語は重に名詞、代名詞より成り、説明語は重に動詞、形容詞より成る。但し、名詞に助動詞を添へ、動詞に助動詞、助

詞等を添ふることあるは勿論なり。次の例を見よ。

木枯^主 吹きに吹く^説

秋は^主 來にけり^説

今日こそ 樂しけれ^説

○助動詞なりたりが説明語となるときは、上に名詞代名詞を加ふることとを要す。次の例を見よ。

時は金なり。 楠公は忠臣なり。

父は父たり。 汝は汝たり。

○助詞かども亦名詞代名詞の下につきて説明語となることあり。次の例を見よ。

こは何事ぞ。

汝は誰か。

二、客語 客語とは、他動詞を説明語とせる文に於て、その目的を示す語をいふ。例へば、

太郎紙鳶を揚ぐ。

余は汝を愛す。

客語

客語の構造

の文に於て、太郎余はは主語揚ぐ愛すは説明語なれど、揚ぐ愛すは他動詞なれば、單に「太郎揚ぐ」「余は愛す」といひたるのみにてはその文意明かならず。之に動作の目的物たる紙鳶を汝をを加へて其の意味始めて全きを得るが如し。此の目的物たる紙鳶を汝をは、即ち此の文に於ける客語なり。

客語は名詞又は代名詞より成り、をといふ助詞を伴ふこと前例の如し。

○客語が時としてをの助詞を伴はざることあるは、第二篇動詞の自他の章にいへるが如し。

補語

三、補語 補語とは、主語説明語客語以外に於て、文意を全くするに缺くべからざる語をいふ。例へば、

秀吉關白となる。影は形に従ふ。

の文に於て、秀吉影はは主語なる。従ふは自動詞の説明語なれど、「秀吉なる」影は従ふ」といひたるのみにては意味なほ全からず、更に關白と形になどいふ語を加ふる要あり。而して關白と形には他動詞の目的を示せる語にあらず、従つて客語にあらずして補語なり。又、

艱難汝を玉にす。落武者芒を敵とあやまる。

の文に於て、艱難落武者は主語、汝を芒をは客語す、あやまるは説明語なり。されど、艱難汝をす、落武者芒をあやまる」といへるのみにては、文意なほ全からず、更に玉に敵とを加へて文意始めて全きを得るなり。而して、玉に敵とは他動詞す、あやまるの目的物にあらず、随つて客語にあ

補語の構造

らずして補語なり。

補語は名詞・代名詞より成り、前例の「に」との外、なほの「を」して、より等の助詞を伴ふを常とす。次の例を見よ。

月光鏡のごとし。

壯烈鬼神を泣かしむ。

頼朝義經をして平氏を討たしむ。

優等生、校長より賞品を受く。

○形容詞を説明語となせる文にも亦補語を要するものあり。次の文の乙に「白絲」との如し。

甲は乙に等し。心は白絲と同じ。

○指定の助動詞なりたり及び助詞ぞか等の説明語となれる文に於て、上に名詞・代名詞を加ふべきことは、已に前にいへり。而して此の加へられたる名詞・代名詞は何れも補語なり。

修飾語

修飾語の構造

四、修飾語 以上、主語・説明語・客語・補語の外、なほ文の組立に用ひらるる一種の語あり。主として文の意味をくはしくせんが爲に用ひらる。之を修飾語といふ。例へば、

白き犬走る。 風景頗るよし。

春風櫻の花を散らす。 母泣く兒に乳を吞ます。

の文に於て、白きは主語犬にかゝり、頗るは説明語よしにかゝり、櫻のは客語花をかゝり、泣くは補語兒にかゝりて、それゝかゝれる語の意味を修飾せり。故に此等は何れも修飾語なり。

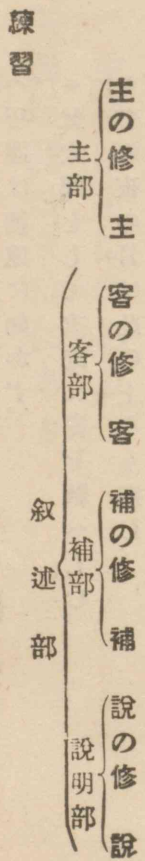
主語・客語・補語の修飾語は、形容詞・動詞の連體段、名詞に結びつきたる助動詞の連體段、若しくは助詞のがを伴へる名詞・代名詞にして、説明語の修飾語は、主として副詞なり。

主部
客部
補部
説明部
叙述部

前例の白き・頗る・櫻の・泣く及び次の例のわが・優勢なる・小・さき・枯れたる等につきて、その構造の一斑を知るべし。

わが軍、優勢なる敵を破る。 父、財産を小さき子に譲る。
鳥枯れたる枝に止れり。

○文の成分は主語・客語・補語・説明語及びそれゝの修飾語なり。而して主語・客語・補語・説明語にそれゝの修飾語を加へて、主部・客部・補部・説明部といふ。又、主部に對し、他の三部を總稱して叙述部といふ。次の表を見よ。



- 一文の主要成分を挙げよ。
- 主語・客語・補語・説明語の構造のあらましを述べよ。
- 三例を示して主語・客語・補語・説明語の修飾語を説明せよ。

四次の文を各成分に分解せよ。

(イ) 教師生徒に宿題を課せり。

(ロ) 鯨は哺乳獸なり。

(ハ) 巧遅は拙速に如かず。

(ニ) 父太郎をして次郎に書を教へしむ。

(ホ) 冬の夜の月は、此の上なく寒し。

(ヘ) 活潑なる精神は、常に健康なる身體に宿る。

(ト) 燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや。

第二章 文の成分の排列及び省略

一、常の位置 文の成分の排列には略、一定の順序あり。
次の例を見よ。

花咲く。

影は形に従ふ。

成分排列の常の位置

孝子は日を愛す。

校長優等生に賞品を與ふ。

校長賞品を優等生に與ふ。

砲聲絶えず轟く。

我が軍大いに敵の精兵を破る。

父終に鉅萬の財産をその子に譲る。

前例によりて、成分排列の一般法則を得ること左の如し。

一、主語は主位にあり。

二、説明語は末位にあり。

三、客語は主語と説明語との中間にあり。

四、補語は客語なき文にては主語と説明語との中間にあり。客語ある文にては客語の上又は下にあり。

成分排列の一般法則

成分の倒置

五、修飾語は修飾せらるゝ語の上に添ふ。但し、補語又は客語を有せる文にては、説明語の修飾語は通例主語のすぐ下にあり。

二、成分の倒置 前に説きたる成分の位置は我が國語に於ける自然の順序なれど、時として、語調を整へ、又は語勢を強むる等の必要より、わざと成分の位置を變じて排列することあり。次の例を見よ。

甲、主語と説明語とを倒置せるもの。

咲け花よ、主 善いかな言や。説

乙、客語を首位に置けるもの。

かゝる放言を誰かは信ぜじ。客

そんなことをあなたは誰にお聞きでしたか。主

丙、補語を首位に置けるもの。

正直の頭に神宿る。補

親のいひつけには子たるものは従はねばなりませぬ。主

丁、客語と説明語とを倒置せるもの。

祝へ我が君を。説

誰か知らん鳥の雌雄を。客

○詩歌には成分の倒置せらるゝもの極めて多し。

成分の省略

三、成分の省略 文の成分はそれごとく一定の職分を有し、濫に加除すべきものにあらずれども、文意の曖昧に陥らざる限りは、之を簡潔にし或は語勢を強くするため、其の中なる或成分を省略することを得。左の例を見よ。

甲、主語を省略せるもの。

(余は明日君を訪はむ。

(世人)鶯を春告鳥といふ。

○命令をあらはす文に於ては、主語の省略せらるゝもの多し。次の例を見よ。

(汝等)前へ進め。(人々)こゝに塵を捨つべからず。

乙、説明語を省略せるもの。

千里の道も一歩より(始まる)。

あなたはどちらへ(いらつしやいますか)。

丙、客語を省略せるもの。

余は少しも(それを)知らざりき。

終日(彼を)待てども、終に來らず。

丁、補語を省略せるもの。

校長(卒業證書を)卒業生に授く。

卒業證書授與式は、昨日(學校で)舉行された。

練習

一文の成分は如何なる位置を取るが常なるか。

二何のために文の成分は倒置せらるゝか。

三文の成分を省略する場合を述べよ。

四次の文の排列を常の順序に改めよ。

(イ) 仰げば尊し、我が師の恩。

(ロ) たゆまず學べ、時の間も。

(ハ) やよ正行、忘れたるか、父の遺訓を。

(ニ) 降る雪に、きこりの道もうもれけり。

(ホ) たれかあはれと聞かざらん、あはれ血に泣くその聲を。

(ヘ) 雲のいづこに月宿るらむ。

(ト) 短蓑直ちに入る虎狼の窟、一と深く探る蛟鱈の淵。

(チ) 誰かいふ、狭くして且陋なりと。

- (リ) 謂ふことなかれ、今日學ばずとも明日ありと。
 - (ヌ) 愉快だつたね、ほんたうに、昨日の遠足は。
 - (ル) 今日有益な御話を私は先生にうかゞひました。
- 五次の文中の省略せられたる語を補へ。

- (イ) 柳は緑花は紅。
- (ロ) やがて十二時ですから、たべてから出かけませう。
- (ハ) もうおかへりですか。どうかごきげんよく。
- (ニ) 皇族下乗。
- (ホ) 樂書無用。

六次の文に於て、差支なき限り成分を省略せよ。

- (イ) 中江藤樹は俗名は與右衛門といひ、近江の人なり。その徳行世に類なかりければ、世人この人を呼んで近江聖人といへり。
- (ロ) 花をちらす風のやどりをば、たれか知る。若しこれを知る

人あらば、願はくはわれに教へよ。われ、そのやどりにゆきて、風にうらみむ。(三十一字の短歌に約めよ。)

第三章 節

「花散る。」「蝶舞ふ。」「風吹く。」「雪降る。」「香が高い。」「満は損を招く。」
 「謙は益を受く。」「雲は龍に従ふ。」「風は虎に従ふ。」等は、何れも主語・客語・補語・説明語等より成れる完全なる文なり。されど、

- 花の散るは蝶の舞ふに似たり。
- 風の吹く音すさまじ。
- 雪降れば、木毎に花を咲きにける
- 梅の花は香が高い。
- 満は損を招き、謙は益を受く。
- 雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ。

名詞節

の如く用ひられたるときは、大きな文の一部分となりてその獨立を失ふに至る。かくの如く、文がその獨立を失ひて他の文の一部分となれるものを節といふ。節はその性質上より之を次の五種に大別す。

一、名詞節 名詞の如く用ひらるゝ節をいふ。

次の例の「花の散る」(主語の用をなす)、「蝶の舞ふ」(補語の用をなす)、「身體の健康なる」(客語の用をなす)の如きは、即ち是なり。

形容節

花の散るは蝶の舞ふに似たり
誰か身體の健康なるを欲せざらじ。

二、形容節 形容詞の如く用ひられたる節をいふ。次の文の「風の吹く」(主語を形容す)、「雪降る」(補語野邊を形容す)、「花咲く」(客語春を形容す)の如きは、即ち是なり。

副詞節

風の吹く音、すさまじ。
余は終日雪降る野邊にさまよひぬ。
雁は花咲く春を見すて、歸りぬ。

三、副詞節 副詞の如く用ひられたる節をいふ。次の例の「雪降れば」(家は貧しけれど)の如きは、即ち是なり。

雪降れば、木毎に花ぞ咲きにける。
家は貧しけれど慈善の心いと篤し。

説明語節

四、説明語節 説明語の用をなせる節をいふ。次の文の「香が高い」(波靜かなり)の如きは、即ち是なり。

梅の花は、香が高い。 瀬戸内海は、波靜かなり。
○かかる場合には、説明語中の主語香が波を小主語といひ、梅の花は瀬戸内海を總主語といふことあり。

對立節

五、對立節 文中の各節が互に相對して、主従の關係なく、

總主語

小主語

全く同等の價值を有せる節をいふ。次の例の各節の如きは即ち是なり。

花笑ひ、鳥歌ふ。

富は屋を潤し、徳は身を潤す。

水は方圓の器に隨ひ、人は善惡の友に因る。

月落ち、鳥啼いて、霜天に滿つ。

附屬節

○此の對立節に對して、前の各節を附屬節と總稱することあり

練習

- 一節とは何ぞ。
- 二節の種類を擧げ、之を例解せよ。
- 三對立節と附屬節との區別を問ふ。
- 四小主語とは何ぞ。總主語とは何ぞ。
- 五次の文に於ける節を指摘し、且その種類を示せ。

- (イ) 花咲く春はいと樂し。
- (ロ) 山高く、水長し。
- (ハ) 前車の覆るは、後車の戒なり。
- (ニ) 國運、旭の昇るに似たり。
- (ホ) たれか光陰の疾く過ぐるを惜まざらん。
- (ヘ) 水清ければ大魚なし。
- (ト) 仁者はいのち長し。
- (チ) 動物の中で、猿ほど人に似てゐるものはなし。
- (リ) 子曰く、剛毅朴訥は仁に近しと。
- (ス) 豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。
- (ル) 爲朝矢二つ三つ放さば、夜の明けざる中に勝負は決すべし。

第四章 文の構造上の分類

文はその構造の上より之を單文・複文・童文の三種に分つ。

單文

一、單文 單文とは節を含まざる文をいふ。例へば、

山高し。
秋風、衣を撲つ。
鳥籠の中に在り。
父、財産をその子に譲る。
わが海軍、大いに露國の艦隊を日本海に破る。

等の文の如し。

○主語客語補語修飾語説明語を重ねたる場合にありても、節を含まざる限りは皆單文とす。次の例の如きは即ち是なり。
屋根も^主庇も^主手水鉢も^主處として^客落葉ならぬはなし。
菅公は才と^客學と^客徳とを兼ね備へたり。
私は幼い時、父にも母にも兄弟にも死に別れました。
我が日本人は清く直く猛き心を持ってり。

複文

二、複文 複文とは名詞節・形容節或は副詞節を含める文をいふ。

花の散るは、蝶の舞ふに似たり。
余は終日蟲鳴く野邊にさまよひぬ。
雪降れば、木毎に花ぞ咲きにける。

の如きは、即ち是なり。なほ前章、名詞節・形容節・副詞節の條を見よ。

三、重文 重文とは、二つ以上の對立節より成る文をいふ。

重文

楠木正行は忠臣にして且孝子なり。

○仁者は命長し。梅の花は香が高いの如きは節を有すれど、この「命長し」。「香が高い」は總主語たる仁者は梅の花はに對しては單純なる説明語の用をなせるのみなり。故に亦單文とす。

梅は香高く、櫻は色美し。

君は遠く去り、僕は永く留まる。

吉野山は花に宜しく、龍田川は紅葉によろし。

月明に、星稀に、烏鵲南に飛ぶ。

の如きは、即ち是なり。なほ前章、對立節の條を見よ。
文は、單文・複文・重文の三種に外ならねど、時としては頗る
複雑なるものあり。今、二三の例を次に示さん。

形容節(重文)

對立節

對立節

我が國には山紫に水明かなる佳景多し。

(重文を含める複文)

複文(對立節)

副詞節

複文(對立節)

氣霽れては風新柳の髪を梳り、氷消えては波舊苔の鬚を洗ふ。

(複文二つより成る重文)

複文(對立節)

單文(對立節)

土裂けて水湧き上り、巖われて谷にまろび入り。

副詞節

單文(對立節)

(複文一つと單文三つとより成る重文)

渚こぐ舟は波に漂ひ、道行く駒は足のたちどをまどはせり。

(複文一つと單文三つとより成る重文)

練習

一文の構造上の種類を問ふ。

二例を示して單文・複文・重文を説明せよ。

三次の文の構造上の種類を示し、且、各文中の節を分類せよ。

(イ) 十五夜の月、皎々として清き光を放ちぬ。

(ロ) 衣は軒に至り、袖は腕に至る。

(ハ) 山は高けれど限りあり、海は深けれどそこひあり。

(ニ) 君子は人の己を知らざるを憂へず。

(ホ) 山寺の鐘遠く聞えて、秋の日は山の端に入りぬ。

(ヘ) 雪は野山をうづむとも、老いたる馬ぞ道は知る。

(ト) 山は裂け海はあせなん世なりとも、君に二心わがあらめやも。

第五章 文の性質上の分類

文はその性質上より、之を敘述文・疑問文・命令文・感歎文の

敘述文

四種に分つことを得。左に之を概説せん。
一、**敘述文** 事實をありのままに敘述する文にして、文の最も普通なる形なり。此の種の文には肯定を表すもの、否定を表すもの、**推量**を表すもの等ありて、その應用の範圍頗る廣し。左の諸例を見よ。

健康は至寶なり。(肯定)

身修まれば、家齊ふ。(肯定)

去年今夜清涼に侍りき。(肯定)

水清ければ大魚なし。(否定)

春は來れども花咲かず。(否定)

兩三日の中に花も咲かむ。(推量)

花咲かば、鶯來鳴かむ。(推量)

都合あしくとも約束を違へじ。(推量否定)

疑問文

二、**疑問文** 疑ひ又は問ふ意を表す文をいふ。左の例を見よ。

彼に限りて、さる悖徳の行爲はあるまじ。(推量否定)

わが思ふ人はありやなしや。

春や疾き、花や遅き。

桃と櫻と何れか美しき。

榮枯は夢か幻か。

汝は誰ぞ。そを何處にか負ひて行く。

疑問文はや、か又はぞを添ふべきこと前例の如し。但し、上に何れ、何處等の疑の語あるときは、や、かを省くことを得。次の例を見よ。

雲の何處に月宿るらむ。

何れを花とわきて折らまし。

○反語の文は、外形疑問文と同じけれど、其の意は全く異なりて斷定を表すものなれば、別に反語文といふ一類を立て、獨立せしむるも可なれど、今は暫くこの形の上より之を疑問文の中に加ふ。

○や、か、やは、かはを含める反語の例は、已に前篇第十章に掲げたるを以て之を省き、こゝには單にぞを含める反語の例を次に示さん。
いかにぞ之を知らん。何ぞ意に介するに足らん。

命令文

三、命令文 命令希求の意を表す文をいふ。之に「かくせよ」と正面より命令するものと、「かくするなかれ」と反面より命令(即ち禁止)するものとあり。左の諸例を見よ。

鳴け鳥よ。

朝は早く起きよ。

兄弟姉妹は仲むつまじかれ。

よく學び、よく遊ぶべし。

空しく光陰を費すなかれ。

無用の者入るべからず。

あるじなしとて春を忘るな。

かひなき事をな思ひそ。

感歎文

四、感歎文 感歎の意を表す文をいふ。左の諸例を見よ。

嗚呼、天道の無情一に茲に至るや。

あはれ、此の殿は大剛の人かな。

うれしやな。

○感歎文は嗚呼あはれやかな等の感動詞を含むを常とす。

○感動詞中、いざいで、の如く單に發語の意を示すもの、若しくはかしの如く單に念を推し意を強ひる意に用ふるもの等を含める文は、普通の敘述文又は命令文と知るべし。

此の如く、文はその性質上より四種に分類せらるれども、

實際にありては、一文中に二種以上の文を含める場合多し。宜しく日常講讀する讀本に就きて之を研究すべし。

練習

- 一 文をその性質上より分類せよ。
- 二 敘述文に於ける諸種の形式を説明せよ。
- 三 命令文及び感歎文の形式を示せ。
- 四 次の文をその性質上より分類せよ。
 - (イ) 人の一生は重き荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。
 - (ロ) あつばれの馬や、名馬や、何者の馬ぞと褒めたまふこと大方ならず。
 - (ハ) 痛はしや、美しき都上藤の、今のうちに灰土とならせたまはん事の無慙さよ。

終止段にて結ぶ文

文の結法には種々の形式あり。今次に之を概説せん。一、終止段にて結ぶもの 文を動詞・形容詞・助動詞の終止

- (ニ) あなあさまし。人もこそ聞け。いかに和上藤たち夜もふけぬるにさやうにはおはするぞ。とくく入らせたまへ。
- (ホ) 君が人生の毀譽を度外に置き、天下後世の議論を顧みざるもの故なきにあらず。嗚呼君の心事誠に悲しからずや。然れども、事已にこゝに至る。之をいふも何の益かあらむ。
- (ヘ) あはれ此の殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人一人もおはしまさざりつるにしいだしたる事よ。門を入り給ふより、聊かも隠したる體も見え給はず、あはれ、この人を大將として合戦せば、いかばかりか頼もしからむ。

第六章 文の結法附係結

段にて結ぶは、最も普通なる形なり。左の例を見よ。

猿も木より落つ。

善を爲すこと最も樂し。

光陰は矢のごとし。

父は父たり、子は子たり。

○弘法も筆の誤、勉強は幸福の母、柳は緑花は紅、君は君、臣は臣などの如く、名詞にて結べるやうに見ゆる文は、何れも下に來るべき助動詞の終止段なり、又はたりを省けるものとす。

連體段にて結ぶ文

二、連體段にて結ぶもの 上にぞや、かなむ等の助詞添はれるときは、下を動詞・助動詞・形容詞の連體段にて結ぶものとす。左の例を見よ。

家^ぞなむ^{なむ}榮ゆる。

光^ぞなむ^{なむ}見ゆる。

名^ぞなむ^{なむ}芳ばしき。

ぞなむやかの係結

夜^や明^めく^くる^る。
明^めけ^けぬ^ぬる^る。
遅^{おそ}き^き。

誰^{たれ}か^かある^{ある}。
知^しる^るべき^{べき}。
賢^さき^き。

かくの如く用ひたるぞなむや、かを指してぞなむや、かの係といひ、下なる連體段の語を指してぞなむや、かの結とす。

○名を天下に掲げたりとぞ、終に善人となりたりとなむ、君の文にや、如何なる罪にかの如くぞなむや、かにて言ひすてたるは、下に來る連體段の語いふ聞くあらむなどを省けるものとす。

○上に何誰いかに等の疑問の語あれば、か又はやなくとも、下を連體段にて結ぶことあり。次の例を見よ。
かく數ならぬ身にて、何しに人の國に渡らんと、心はつきけむ。

已然段にて結ぶ文

三、已然段にて結ぶもの 上にこそその助詞添はれるとき

は、下を動詞・助動詞・形容詞の已然段にて結ぶ。次の例を見よ。

家こそ榮ゆれ。 夜こそ明けぬれ。 名こそ芳しけれ。

こそ係結

かくの如く用ひたるこそを指してこそ係といひ、下なる已然段の語を指してこそ結といふ。

○感ずべきことにこそ如く、こそにて言ひすてたるやうに見ゆる語は、下に來るべき已然段の語あれありけれ等を省けるものとす。

○心知りの友どちなむ別れ難く思ひて、しきりに訪ひ來、われこそ見送に行くべかりしを、え果さざりけりなどの如く、結となるべき用言を言ひ切らずして下につゞくることあり。かゝる場合には、係に對する語は自然に缺くるものとす。

○係に對して結ぶべき位置は一定せるものなれば、他の處にて誤り結ぶべからず。次の文の如きは何れもその結び方を誤れるものとす。

命令段にて結ぶ文

この時こそと思ひたれ。菊の花は今ぞ盛と告げこしける。

四、命令段にて結ぶもの 動詞・助動詞の命令段にて結ぶ文をいふ。次の例を見よ。

急がばまはれ。
疾く行きぬ。
下女に庭を掃かしめよ。

助詞にて結ぶ文

五、助詞又は感動詞にて結ぶもの 次の例を見よ。

甲、疑問の助詞又は指定の助詞にて結ぶもの。

今日は何曜日なるか。
進まうか、それとも退かうか。
君は某君の近状を知れりや。
大和魂そは何ぞ。

○このぞを係のぞにて下に連體段の結を省けるものと混同すること

感動詞にて
結ぶ文

なかれ。

乙、感動詞にて結ぶもの。

あなちもしろの春雨や。

あゝ盛なるかな。

感心な心懸でございますな。

練習

- 一 文の各種の結法を説明せよ。
- 二 ぞなむやかの係結とは何ぞ。
- 三 こその係結とは何ぞ。
- 四 次の文の結法並に係結を説明せよ。
 - (イ) 精神一到せば、何事か成らざらむ。
 - (ロ) 柿本人麻呂なむ歌の聖なりける。
 - (ハ) 民をおもほす御心に、大御衣やぬがせたまひし。

- (ニ) 兵のこゝにこそといはんずる一言をぞ待たせたまひける。
ホ昨日こそ早苗とりしか、いつのまに稻葉そよぎて秋風の吹く。
- (ヘ) 世の中は何か常なる、飛鳥川、昨日の淵ぞ今日は瀬になる。
- (ト) 花橘は名にこそ負へれ、猶梅の匂にぞ、いにしへの事も立返り、戀しう思出でらるゝ。
- (チ) 恐しく、鬼も子を生むにや、鬼の子は如何なるものにか。
とて、物越しに人見たりしに、その親の鬼ならば、さこそはあらめ。
- (リ) 光範より賜はせける刀は、ありし有様をくはしく書き添へて返しけりとかや、いとあはれなる事にこそ。
- (ヌ) 今の帝、亦天照大神よりこの方の正統を受けましくぬれば、この御光に争ひ奉るものやはあるべき。なかくかくてしづまるべき時の運とぞ覺ゆる。

(ル) 文覺佐殿に故下野殿の御首を進らせつゝ、國こそ多く處こそ廣きに、當國へしも流されけるは、さるべき佐殿の骸にも見參したまふべき事にやとあはれにこそ候へどて、ばらばらと泣きけり。

師範學校 日本文典終

師範學校 日本文典

大正五年十一月八日印刷
大正五年十一月十一日發行
大正六年二月五日訂正再版印刷
大正六年二月八日訂正再版發行



著者

東京市小石川區高田老松町五十二番地

吉田彌平

著者

東京市小石川區小日向臺町二丁目四番地

小山左文二

發行所

東京市神田區通神保町六番地

上原才一郎

發行所

東京市神田區通神保町六番地

光風館書店

(電話) 神田三〇八七番
(振替) 口座東京三二七番

本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候は、直に御送附可致候

行發館風光
書用科教科語國

東京高等師範學校教授 吉田彌平編

師範國文

學校範圍國文教科書

中國國文教科書

現代文新鈔

近世文新鈔

近古文新鈔

東京青森縣立學校教授 文學博士 高野辰之編

子女國文讀本

實業國文讀本

東京高等師範學校教授 文學士 保科孝一編

實業國語教科書

東京女子高等師範學校教授

現代女子作文

東京高等師範學校教授

太平記鈔本

新用全十册

一部用全六册

本科用全六册

二部用全一册

修正十七册

修正五册

修正五册

修正一册

修正二册

修正十册

修正十册

修正四册

修正一册

平家物語鈔本

增鏡鈔本

保元平治物語鈔本

光風館編輯所編

現代文鑒

徒然草鈔本

常山紀談鈔本

十六夜日記講本

花月草紙鈔

東京立教中學校教授 諸星寅一編

徒然草讀本

佐藤正範編

神皇正統記鈔本

方丈記讀本

訂正一册

訂正一册

訂正一册

訂正一册

訂正一册

訂正一册

訂正一册

訂正一册

訂正一册

訂正一册

訂正一册

訂正一册

訂正一册



広島大学図書

2000026586



版
7
86